

岩手県文化財調査報告書第三十六集

奥州道中

岩手県「歴史の道」調査報告

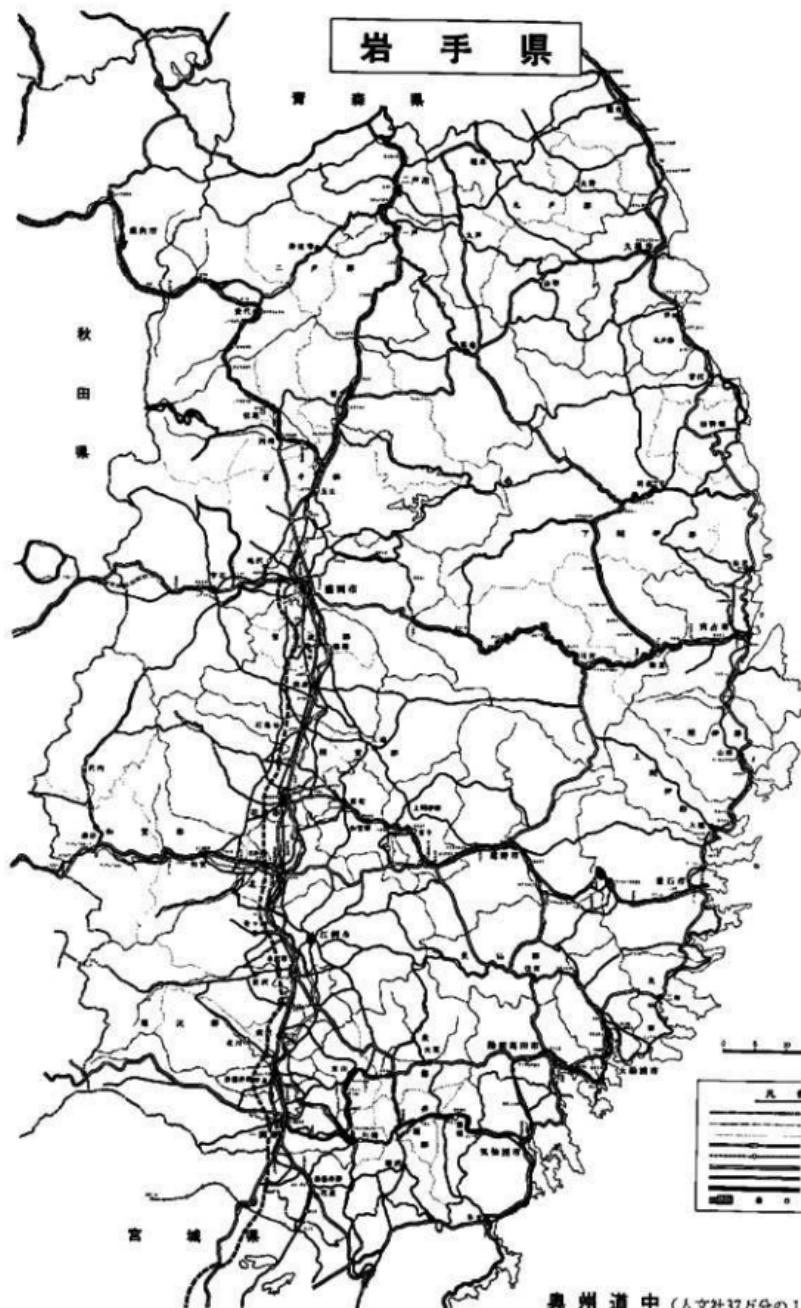
岩手県教育委員会

岩手県文化財調査報告書第三十六集

奥
州
道
中

岩手県「歴史の道」調査報告

岩手県



奥州道中（人文社37万分の1より）

序

本県は、日本列島のうち東奥とよばれる地域に位置し、県では全国一の広大な面積を有しておりますが、山地が多く、かつては交通が大変不便であります。

しかし、近年、産業経済が著しく発展し、社会構造が変遷するなかで、かつての街道は改良され、交通の不便さは一新されました。しかし、交通関係の遺跡もまた急速に失われてきております。

この報告書は、こうした現状を重視し、昭和五十三年度国庫補助を受けて、歴史の道ともいべき明治時代初期以前の「奥州道中」について、周囲の環境を含めて総合的かつ体系的に把握調査し、その成果を集成したものであります。

本書が、今後の交通関係遺跡の保護および歴史の道研究の一助となれば幸いであります。

なお、調査に御協力いただいた調査員各位ならびに関係市町村教育委員会、諸資料を提供してくださった方々に対し、衷心より感謝申し上げます。

昭和五十四年三月

岩手県教育委員会

教育長 畑山新信

例　言

一、本書は歴史の道「奥州道中」に関する報告書である。

二、本調査は、主として次にあげるものを収集し、調査を実施した。

(+) 収集したもの

古文書、地誌類、紀行文、古絵図類や明治時代の測図など。

(+) 調査した事項

ア　道及びこれに沿う地域に残る遺跡の分布状況と保存の実態。

イ　道に沿って設置されている博物館・郷土館・資料館・史料館などの公開施設の実態と問題点。

ウ　江戸時代の国界・藩界及び郡名。

三、本調査の調査員、補助員は左記のとおりである。

主任専門調査員

草間俊一　岩手大学教授

専門調査員

細井計　岩手大学教授

〃

吉田義昭　盛岡市教委文化財専門員

地区調査員（二戸市）田中庄一　二戸市文化財調査員

〃　（一戸町）稲葉浅吉　一戸町文化財調査員

〃　（岩手町）高橋昭治　北奥古代文化研究会地区員

〃　（玉山村）太田忠雄　玉山村文化財調査員

〃　（滝沢村）福田武雄　滝沢村文化財調査員

〃　（盛岡市）菊池常雄　滝沢村文化財調査員

タ　タ　タ　（盛岡市）平石玄松　都南村見前中学校長

タ　（都南村）勝文子　重範　都南村文化財調査員

(矢巾町) 川村仁左衛門 矢巾町史編纂委員

(紫波町) 佐藤正雄 紫波町文化財調査員

(石鳥谷町) 高橋清一 石鳥谷町文化財調査員

(花巻市) 錦田辰男 花巻市文化財調査員

(北上市) 千田茂光 北上市史談会員

(金ヶ崎町) 朝倉一二三 金ヶ崎町文化財調査員

(水沢市) 小林晋一 水沢市史編纂委員

(前沢町) 吉田菊治郎 前沢町公民館運営審議会委員長

(平泉町) 南館広太郎 平泉小学校教諭

(一関市) 千葉一郎 一関市文化財調査員

補助員 高橋哲郎 岩手大学文部技官

斎藤恵美子 岩手大学教育学部専攻科学生

大村尚視 岩手大学教育学部学生

四、本書の執筆分担は次のとおりである。

調査の目的と總括 草間俊一

奥州道中について 細井計

奥州道中の現状

一関市と金ヶ崎町 細井計

北上市と盛岡市 吉田義昭

盛岡市上田と二戸市 草間俊一

街道に沿った公開施設

五、調査の方法は、第一次調査として地区調査員が調査カードを作成し、調査カードにもとづき専門調査員が第二次調査を行なった。
六、本書は草間俊一が總括し、文化課が編集にあたった。

目 次

岩手県教育委員会教育長 畑 山 新 信

序 例 言

一、調査の目的と総括

二、奥州道中について（五街道と奥州道中・並木と一里塚・岩手県内の奥州道中）

三、奥州道中の現状

(+) 一関市と金ヶ崎町

(+) 北上市と盛岡市

(+) 盛岡市上田と二戸市

四、街道に沿った公開施設

資 料

(+) 増補行程記

(+) 北奥路程記

64 64

61 36 22 12 12 8 7

一、調査の目的と総括

「古くから、文物や人々の交流の舞台になつて來た道、河川・運河などの交通路は、我が國の歴史を知る上できわめて重要な意味を持っているが、これまでには、並木街道、開跡、一里塚などのごとく一部の交通関係の遺跡について部分的に史跡に指定して保護を講じてきた。ところが近年における国土の開発、とりわけ道路改良事業、農業基盤整備事業、造林事業などによってこれら道などをはじめとする交通関係の遺跡は急激に失われてきており、例えば、江戸時代の五街道のような誰でもが知っている道ですら、地図上で復原し、プロットすることが困難になつてきている。そこで、これらの「歴史の道」ともいべき江戸時代以前の古い道・河川等交通関係の遺跡を周囲の環境を含めて総合的かつ体系的に把握、調査し、国民が歴史に親しみ、我が國の成り立ちを振りかえる一助としようとするものである。」

以上が、今度の一歴史の道調査に当つて、文化庁が掲げた目的である。本県も、その旨に沿つて、二ヶ年計画で、古い道、河川等の交通関係の遺跡を全県に亘つて調査しようとするものである。初年度の昭和五十三年には、県内の大道である奥州道中と芭蕉の「奥の細道」関係の遺跡を調査することにした。

「奥の細道」については、長年に亘つて、この事に興味をもつて研究していた伊勢若吉氏を中心にして千田一司氏、増子基太郎氏がこれに当つた。調査は元禄十二年の「仙台藩御領分縫図」(宮城県図書館蔵)、登米町候古館の「元禄の古松園」元禄十二年の「磐井郡元保松園」(八巻一雄氏蔵)などの古絵図によつて、現地を長年に亘つて実地調査した結果、別冊に報告したよう結論に達したものである。

奥州道中は、細井計氏、吉田義昭氏に草間が専門調査員となつて、関係の各市・町・村毎に、現地に精しい二十名の調査員を委嘱し、その協力を得

て、実地に当つて調査した。

調査の範囲が、江戸時代の盛岡藩と仙台藩に亘つていて、盛岡藩は「南部領貢享圖」(岩手県立図書館蔵)、仙台藩は元禄十二年の「仙台藩御領分縫図」(仙台市・青藤報恩会蔵)による道路、一里塚などを、陸地測量部刊行の五万分之一地形図の最初のもの(大正四年発行)に当つて検討し、現在の五万分之一地形図によつて調査した。なお、盛岡以北については、藤戸茂樹「北輿略記」(「南部叢書」所収)があつて参考になつた。盛岡以南については、清水秋全「増補行程記」(盛岡市公民館蔵)があつたが、調査時点では利用出来なかつたのは残念であった。

なお、岩手県立図書館には、幕政時代の絵図や、道中記などの街道について書いたものが各種あり、それぞれ参考になつた。盛岡市公民館資料室には、旧盛岡藩の文献記録が一括保管され、「歴史の道」の調査に参考になる文献記録類が数多くあるが、丁度五十三年八月より改築中で閲覧禁止となつてゐるので、思うように利用出来なかつたが、係官の好意によつて、一概閲覧を許された。その中で前記の清水秋全の「増補行程記」をはじめ、関係市町村の含まれる「通縫図」があり、旧道の精細が明らかとなつた。仙台藩では盛岡藩のような通り松園に代つて、郡毎、村毎の絵図がある宮であるが、その上に当ることは出来なかつたが、地元調査員はそれらをふまえて現地調査をしているので、その欠を補うことが出来たと考える。なお、八戸市立図書館には八戸藩関係の文献記録が数多く保管されている。中でも遠山家文書の中にあらわす道中記関係の記録は興味あるもので、盛岡藩の道中記が盛岡どまりであるのに、県北地方の記述があつて、その欠を補つてゐる。

その外に、個人で絵団面や記録を所有している人がある。一関市の八巻一雄氏、矢巾町の川村仁左衛門氏、玉山村の駒井哲雄氏、戸町の高村正氏、二戸市の田中庄一氏、奥昌一郎氏、二戸市立歴史民族資料館の田中館文吉などである。今度の調査は着手から報告書作成まで期間が短かく充分検討して

いる時間もないので、三か年調査終了までには、これら交通関係の資料を整理して、重要なものは印刷する必要があると考えている。

紀行文では菅原真澄遊覽記（『南部叢書』所収）をはじめ、高山彦九郎の「北行日記」（『高山彦九郎全集』所収）、吉田松陰の「東北遊日記」（『吉田松陰全集』所収）、古河古松軒の「東遊雜記」（『東洋文庫』所収）をはじめ、簡単な紀行が岩手県立図書館や公民館に所蔵されている。なお、江戸時代の風土記などの地誌類も、当時の状況を知る上に参考になるが、仙台藩の安永の風土記は「宮城県史」に、盛岡藩の「邦内郷村志」や「奥州風土記」などは「南部叢書」に入っている外、重要な資料については、それぞれ専門調査員が、その分担の項目でふれられているので省略する。また「岩手県史」の交通関係の記述は大変参考になる。

なお、岩手県の主要街道は江戸時代は奥州道中で、現在は陸羽街道また、国道四号線であるが、江戸時代より前には、平泉から奥地に入るのに、北上川の東岸に「あずま街道」があつたといわれ、それが木沢市黒石の黒石寺や北上市の田見山極楽寺、東和町成島の毘沙門堂など仏教文化を流入する通路になっていた。また稗貫郡や紫波郡には「鎌倉街道」や「安倍街道」と称せられる、藩政以前の旧道のあつたとされている。これらは、部分的に存在して、全体がつながらないが、古い「歴史の道」として調査する必要があると考えている。しかし、今度の調査は期間の関係もあり奥州道中だけに限定して調査した。調査は古い絵図をもとにして、現状を報告することにした。その際、江戸時代の状況を絵で示している清水秋全の「増補行程記」と塩戸茂樹の「北奥路程記」は当時の状況を知ると参考なると考えたので、その大半を掲載して大方の参考に供した。

調査報告書の作製に当つては、分担をきめて執筆したが、用語は統一するにいた。「奥州街道」は正式には「奥州道中」であったので簡潔にいうこととした。「奥州街道」は正式には「奥州道中」であったので簡潔にいう場合は「旧道」とした。国道四号線と深い関係があるので、「国道」と表現したのは国道四号線の意味である。

なお、沿道の文化財については列記するだけで、説明を省略したのは心残りであるが、「岩手の指定文化財」（岩手県教育委員会・昭和四十二年）、「岩手の指定文化財」（岩手県文化財愛護協会・昭和五十年）、吉田保正、「岩手の仏像」（岩手県文化財愛護協会・昭和五十年）のあることを紹介しておくことにした。

一、奥州道中について

(一) 五街道と奥州道中

慶長五年（一六〇〇）、美濃の岡ヶ原の戦で朝倉を確立した徳川家康は、翌年正月、東海道の各宿に対し、伊奈忠次・彦坂元正・人久保長安の連署による「御伝馬之定」を出して、伝馬制度を定めた。ついで慶長七年、中山道と奥州道中にも伝馬制度が設けられた。こうして江戸の日本橋を起点として品川から大津までの五三次からなる東海道をはじめとする五街道が、江戸を中心にして、幹線道路としてしだいに整備されていく。とくに、参勤交代制度の確立や商品流通の発展はそれを一段と推進し、やがて全国各地の往還（道路）も整えられた。

江戸時代の幹線道路としての五街道は、後に述べることなく、幕府道中奉行の管轄下に置かれていたわけであるが、その名称となると、多くの概説書には、東海道・中山道・奥州街道・日光街道・甲州街道と記述されている場合が多い。しかし、幕府の道中奉行所、あるいは伝馬役所で編成したものとみられる「駅印録」には、次のように記されている。

東海道

中山道

奥州道

日光道

右回路

調査報告書の作製に当つては、分担をきめて執筆したが、用語は統一するにいた。「奥州街道」は正式には「奥州道中」であったので簡潔にいうこととした。「奥州街道」は正式には「奥州道中」であったので簡潔にいう場合は「旧道」とした。国道四号線と深い関係があるので、「国道」と表現

右之通、向後可相心得旨（正徳六）中秋月十四日河内守殿松平石見守・伊勢伊勢守並被御賜候

したがつて、右の記述からすれば、正徳六年（一七一六）以降の五街道に於ては、東海道・中山道・奥州道中・日光道中・甲州道中の名称を正式なものとみなすべきであろう。ただし、文化八年（一八一）六月、各往還の発着地点についての何の中には、「東海道・中山道・甲州街道・奥州街道・

日光街道・水戸街道・佐倉街道・右七海道も、何れ之宿より何れ之宿迄之儀に御座候哉」ともあるので、非公式には奥州街道・日光街道・中山街道などとも称されていたようである。一方、その何に対して道中奉行が返答した付札には

東海道は品川より大津迄、中山道は板橋より守山迄、尤木曾路と相模中候、甲州道中は内藤新宿より上坂訪迄、日光道中は千住より鉢石迄、奥州道中は白沢より白川迄、水戸道、佐倉道とは咽不申、水戸・佐倉道とは唱候候、千住より杉戸迄に有之候

とあることによって（『日本財政経済史料』第九卷上）、五街道の正式な区域が知られる。奥州道中は白沢から白河までの一〇宿をさすことになる。

したがつて奥州道中は、後にも述べることく、嚴密には、下野の白沢から陸奥の白河までの区間であるが、一般には、白河以北の往還も奥州道中あるいは奥州街道などといったようである。なお、参勤交代で白河以南の奥州道中を利用した大名は三七家を数え、東海道の一四六宿について利用が多かつた。また、五街道の各宿駅の常備人馬をみると、東海道は一〇〇人・一〇〇匹、中山道は五〇人・五〇匹、その他の甲州・日光・奥州の各道中は二五人・二五四の規定であった（『道中秘書』）。

五街道は江戸幕府の直轄で、道中奉行が支配した。この道中奉行は、幕藩制的な交通制度の維持を目的とした職制で、「万治二年七月十九日、大目付高木伊勢守久、始て道中奉行兼帶」（『古事類苑』官位部三）をもつ

て、初めて設置されたとみられている。丸山雅成氏の研究によれば、この高木伊勢守の道中奉行兼帶は、従前の機械的制度化を一步進めたものであつて、その後の道中奉行の職掌も、大目付と勘定奉行との協議によつて執行されたらしいが、表面的には、まだ大目付兼帶の一人職であつたという。その後、「道中秘書」によれば、

道中奉行 大目付老入 御勘定奉行老入

但、古来は大目付老入、而相勤候候、神尾備前守大目付之筋、元禄十二年、御勘定奉行松平美濃守道中奉行加役被仰付、大抵以來向人、而相勤中候、尤當時公事方御勤定奉行有る兼帶いたし候得共、増生主請止勤役之筋は、御勤手万ガ兼帶いたし候

とあるように、元禄十二年（一六九八）、勘定奉行公事方の松平重良が道中奉行加役となることによって、以後の道中奉行は、名実ともに大目付と勘定奉行の双方から兼帶する二人職（定員二名）となつた。大目付が道中奉行を兼ねる場合は兼帶といつて主席、勘定奉行の場合は加役といつて次席とした。

元禄・正徳ごろの道中奉行の職掌については、享保初期（享保元～六年）に道中奉行であった松平石見守・伊勢伊勢守両人の「加役道中奉行勤務方之儀申上候書付」に、詳細に述べられているが（『駅肝録』）、一般的には、五街道とその付属往還を支配したほか、おおよそ次のとおり内容のものであつた。

一宿拌借・類燃拌借・馬銅料拌借・助脚共
一助脚替
一御旅爲宿入用・石代并何田方五分以上横毛免除之事
一五海道並木立枯御拝伺
一五海道演繹御書請之事

また道中奉行という職制は、すでに丸山氏も指摘していることく、独立した行政機関の一つであつたにもかかわらず、それが大目付・勘定奉行の兼帶・加役といった形をとつていたため、はじめから中途半端で曖昧な性格を内

包していた。大目付が一切の政務を監察したことは周知のことであるが、そ

のほかにも、分限方・服忘方・鉄砲改方・指物方・宗門方・御日記方・道中

方を分掌して、いたように、勘定奉行にとつても、道中奉行加役は「臨時御用掛」であり、道中方は大手門内にあつた下勘定所の「分課にすぎなかつたの

である。なお、天保五年（一八三四）五月、下勘定所の分課を改めた時の道

中方の職掌は、次のとおりである（「校訂江戸時代制度の研究」）。

五街道佐島宿の人馬口・旅差役及諸宿の取扱、助郷村費・五街道宿禰安修差等の費

用、各駅の官賃金及賃料、助成金預存の箇中空の調査を担当。

次に、道中奉行と勘定奉行の支配区域について、簡単に触れておこう。天保七年（一八三六）七月、道中奉行に差出した「道中御奉行御支配五街道之外往還、御勘定奉行御支配國々井脇往還等、何れか者を御支配と申儀、兼而心得罷在度、此段奉伺候」という支配区域例に対する、道中奉行が返答し

た付札には、次のように記されている。

道中奉行支配之分

東海道 品川宿より守口迄 佐谷路

中山道 板橋宿より宇山迄 吉良郡 美濃路 日光側帶道

水戸佐倉道 新宿より八幡 水戸迄

日光道中 千住より跡川迄 王生 御成道

奥州道中 白波より白川迄

甲州道中 内藤新宿より上野藤原

右之外、都南路往還之分、御勘定奉行取扱候事（「諸例撰要」）

すなわち、東海道・中山道・日光道中・奥州道中・甲州道中のいわゆる五街道と、これに付属する諸道（佐谷路・美濃路・日光側帶道・千生道・御成道・水戸佐倉道）は道中奉行の支配であり、その他の脇往還は、すべて勘定奉行の取扱い下にあつたことが知られる。

（二）並木と一里塚

五街道をはじめとする江戸時代の往還は、「其場に寄不同の候得共、幅武間以上無之候而是駄荷行進も難成」（「駄肝録」）とあるように、道幅二間以上を標準としていたらしい。一般に、大道二間・中道二間・小道一間といわれており、五街道をはじめとする主要な往還は道幅二間、それにつぐ脇往還は二間、そのほかの小道が幅一間程度を標準としていた。

往還の両側には、主として松をもって並木が植えられた。延宝七年（一六七九）三月には、奥州道中の並木の松が荒れて、數多く切れ目ができるので

役人を派遣して見分させた上で、相応の松—それも大木では根がつきかねるので、小ぶりの松を植えさせる。その人足扶持は今回は幕府から出す。そして「並木之松荒候儀へ、日来心付無之故」で、「油断之至」であるから、

「向後荒候ハ、其所之もの可為度候間、常々心を付ケ、自然枯候歟、風雨ニ而倒候儀有之時ハ、所之者役ニ掛け、植立候様急度申付可被置候」（「徳川禁令考」）と、並木の松の植立について伝達されている。

このように五街道の並木については、「手入植足ミ小上手築立、田畠境定杭建等之儀」や「立植足等之儀」（「駄肝録」）が、道中奉行にしばしば伝達されており、その上、並木が旅人の往来の助けにもなるので、立植などの跡地には苗木を植えるよう、安永年中（一七七二～七八）と寛政元年（一七八九）に、次のごとく宿々へ中触れられている。

五街道宿々往来並木之儀は、旅人往来之助にも相成候處ニ有之、右立植風折根並木等有之候節は、其支配御代官より相属右之分役取、點綴並木植付道面後取候事品は、御勘定所五個御前政等略候仕候事、御弘之積り中渡候事、御勘定所五個御前政等有之、相属候節は、右之分取払

但、私領御新宿近方之儀は、並木立植風折根並木等有之、相属候節は、右之分取払

並地並苗木植付候様の取計附開事以中渡候事（「駄肝録」）

右のような事情は、盛岡藩の場合も同じようであった。たとえば、家老席の日誌である「雜書」をみると、延宝元年（一六七三）一〇月二十五日、家老席

連署による並木の保護と植樹に関する「証文」が記されている。それによれば、仙北町同心町のはずから鬼柳舟場までの奥州道中と、夕顔瀬より宇石町までの秋田街道の両側に、先年から植えておいた松や漆が枯れて、所々に間隙が生じたので、延宝三年（一六七五）から向う三年間、「枯木伐木も無之様に、老闇に松にても漆にても毫本宛」植えることを命じている。そしてさらに

一株之苗は此方より可悲哉、苗無之候は、漆之天井被抜根間、ふせ置後ノ植可申事
一松に虫付候ハ、油脂不生其方共走候、虫多不成候内に精を出取可申候、若又精出
取候上にも、虫大に付候て不獲取候ハ、吟味之上、人足可被抑送候也

とも記している。

一方、一里塚については、「大道中路凡テコノ塚ヨリ三十六丁ニシテ道路ノ左右ニ必スコノ塚ヲ設ク」とあるように、三六町（一里）ごとに設置された。一般に、一里塚は特使徳川家康の命を受けた右大将秀忠が、東海・東山・北陸の諸道を修理し、「一里」とに敷幅五間の塚を道の両側に相対して築かせ、その頂上に櫻・松・杉などを植えさせたといわれている。『徳川禁令考』は慶長九年（一六〇四）二月四日、「詔海道ニ一里塚を築く事」と題して、『天寛日記』を引用して次のとく記している。

將軍家被仰出、詔海道ニ一里塚つゝ可申由、右大將家被仰出、國君代官ニ被仰
付、道中ニ是を要、道之兩方ニ松を植可申由、右大將家より本多佐太夫、永井秀右
衛門奉行ニ被仰付、東海道中山道より築初むる、當年代製、但、月日難不詳、今御
家忠日記慶長日記云、公ヘ松ヲ植申ヘキカト問焉ニ、ヨリ木航
サセヨト有シヲ聞カヘ、櫻木ヲ植シトイリ……

また、「徳川実紀」の「東照宮御実紀」慶長九年二月四日条には、「右大將殿の命として、諸国街道一里毎に塚を築く（世に「一里塚」といふ）を案かしめられ、街道の左右に松を植えしめらる」とあり、さらに同年五月条の末尾にも、「是月、先に右大將殿より命ぜられたる諸国塚、ことごとく成功す」とある。これらの記述が正しいとすれば、「塚」とは、般に「一里塚」といわれて

いるものであるから、諸国の一里塚は、慶長九年（一六〇四）二月に徳川秀忠の命令によって築造が開始され、同年五月には完成したことになる。

しかし一方、「当代記」には、「慶長九年八月、当月中、関東從右大將秀忠公、諸国道路可作之由使相上、広サ五間也、一里塚五間四方也、関東奥州迄右之通ナリ」ともあり、先きの「徳川禁令考」の末尾にも、「当代記」と同様な記事がみられるので、一里塚の築造開始は慶長九年八月ということになる。

したがって、慶長九年に幕府が一里塚の築造命令を諸国に出したことは確實であるが、その着手および完成の月日については、今のところ、ともに不明といわざるをえない。

次に、盛岡藩領の一里塚について、簡単に触れておこう。通説によれば、領内を南北に走る奥州道中の一里塚は、慶長九年（一六〇四）に築造されたと考えられているが、板橋源氏は慶長・五年五月に完成したとみている。『郷村古史見聞記』には、「諸国宅里塚始之事」として、

慶長九年中辰年、依 台命、山本新左衛門、榎本清右衛門下向、東奥の駅路に奉里
塚を為塚、此年、五畿七道ともに司職之旨、蒙 台金劉之

とある。ここでいう「東奥」とは、盛岡藩をさしていることは、いまでもない。さらに、「御當家秘書」ともいわれた「鶴鳴家訓」には、

慶長九年辰年二月四日、江戸ヨリ諸国道中筋五、甲塚被仰付候、公儀、右為御奉行大
久保右見守御創り、同十五庚戌年出来

ともある。この両書に「徳川実紀」の記述を合せて考えれば、慶長九年二月に幕府から一里塚築造の命令を受けた盛岡藩は、同年中に最善の努力を払つて、奥州道中の一里塚を大体完成したものと思われる。当時の幕命が、至上的ものであったことを考えれば、当然のことであろう。なお、「鶴鳴家訓」の「同十五庚戌年出来」という記述は、脇往還の一里塚まで完成したのが、慶長・五年（一六一〇）ということであろう。

したがって、盛岡藩領の一里塚は、まず、慶長九年（一六〇四）に奥州道中のものがほど完成し、その駒往還の一里塚の築造には、その後数年を要し同一五年になって、領内の一里塚のはとんとが、一応完成したものと思われる。そして、このような領内の一里塚は、その後の道路の改修や切替などによって、随時、その補修を必要としたものと考えられる。したがって場所によつては、慶長以降になつて、新らしく一里塚が築造されたところもある。

仙台国分町伊勢屋半右衛門板、宮城県図書館蔵)が知られている。この奥州道中の岩手県の現状がどのようになつてゐるかそれぞれの報告によつて知ら
れたい。

(付注)

丸山雅成『近世駅の基礎的研究』第一を参考にしたほか、「駅跡」は「日本交通史叢書集成」第二集、「道中秘話」は「古事類苑」政治篇四を利用してした。

三 岩手県内の奥州道中

以上のごとく、奥州道中は、江戸幕府直轄の五街道の一つで、嚴密には、宇都宮の次の白沢から白河までの区間（一〇宿）であるが、一般には、白河以北もその延長としてとらえられ、奥州道中とか奥州街道の名称をもつて呼ばれていた。そのほかでは、江戸道中・奥道中・南部盛岡道中・仙台松前街道・函館街道などの呼称が残されている。これを支配区域からみると、白河までは幕府道中奉行の支配下に置かれており、それ以北の津軽・厩に至る往還は、幕府勘定奉行の取扱いとなつていて。

この奥州道中は、江戸を起点とする主要な幹線道路の一つとして、とくに参勤交代制度の確立や全国的な商品流通の進展とともに、より一層の整備をみることになった。そして、寛政四年（一七九二）、ロシアの使節ラツクマンが根室に来航して通商を求めて以来、急速に北方警備が重要な課題となり、以後、幕末にかけては幕史や諸藩士の往来が頻繁になるので、盛岡以北もさだいに整備されていったものと考えられる。

さて、この奥州道中の中でも、現在の岩手県に属する区間をみると、南の一関から山の目・前沢・水沢・金ヶ崎・鬼柳・花巻・石巻・郡山・盛岡・波戸・沼宮内・一戸・福岡・金田までの一五宿である。これらの宿駅を、「口のあけたて一ノ闇なり、山の目で酒呑んだゆえ、利沢をつい水沢に通る旅先……」といった調子で、おもしろく詠みこんだ「奥道中歌」（文政二年、

（一）一戸市と金ヶ崎町

県境から一戸まで

江戸時代の奥州道中（以下、旧道といふ）は、有號から鬼死坂に通じていた。この道筋に沿つて、岩手・宮城の両県境の部分約五〇〇mの区間は道が消え、現在は篠塀などが生繁りて使用されないが、路肩などから旧道の面影がわずかにしのばれる。この部分を越えると、旧道は約五〇〇mの間、昭和五一年に施工された林道と重なり、さらに北進して、岬から鶴坂を下り三八五貨物の所で、現在の国道四号線（以下、国道と略称）に合流する。

文化五年（一八〇八）の「鬼死坂村絵図」によれば、この道の両側に松並木があつたが、現在は、岬より約一五〇m北上した右側に、その名残りの松が一本だけ残っている。この旧道は、「牧太坂長三丁五拾五間、当郡一間より三泊有櫻町への通路」（安永四年鬼死坂村風土記御用書上）であり、大正五年（一九一六）の「真滝村誌」によれば、「山坂多々車馬ヲ通ズル能ハザルヲ以テ」、明治十六年（一八八三）に国道が改修されて、現在の四号線に切换えられた。

牧田橋の手前の国道の左右に、鬼石（動石・青骨石・兜石）がある。鬼死坂村風土記御用書上によれば、鬼石については、「右石、田村將軍鬼神御退

治の節、大竹丸党類此所迄去候を、將軍御追懸被遊、於此所御退治被成候。鬼の死体相埋候上に、右石を指置候山中伝説事」とあり、また、助石について、「右石に付、山來相知不申候、鬼石より一丁余引隔有之候事」とある。

旧道は、この牧田橋をすぎた所で国道と分れ、その左側の耕地の中を北進し、東北本線の敷地を横断して千葉賢男家付近に至るが、その間の旧道は現存しない。同家の所から、北に向って残っている旧道は、現在部落の通路として使用され、それに沿って、左に銀杏、右に松並木の名残りの松一本をみながら北進すると、左側に、明治九年（一八七六）御巡幸の際の「明治天皇小体遺蹟」と、同天皇に獻上したという「的場清水」が現存する。ここから旧道は姿を消し、その後は、東北線の右あるいは左側を進み、さらに国道と合流して字原下に至る。ここには、東北最初の解剖記念碑である「豈古の墓」（天明五年・一七八五）が、国道を見おろすよう建っている。旧道はこの墓から約二五m北上した水準点付近から、大体、国道の左側を走る東北線の敷地上を北進するので、昔の姿はまったくない。

千刈田（一関市南町）の南端で、鉄道敷地と分れて西進する旧道は、瑞川寺の前から旧足軽屋敷跡を通る市道と重なり、そこから南小学校の敷地内を横切って国道に合流している。安永の風土記書上には、「一千刈田新五拾人町、屯丁武拾五軒、右は御足軽町に御座候」とあり、現在、道路の左側に、舊足軽屋敷一軒が残っている。また、文化五年（一八〇八）の鬼死骸村縫図によれば、この町の両端に、「町切門」が置いていたことが知られる。

御手廻橋をすぎて約一〇〇mで左折した旧道は、招魂社の参道の所で岩が崎道と合流して、ふたたび台町で国道に入る。この岩が崎道との分岐点には「右ハはざま、左ハせんだい」と記された元文元年（一七三六）の道標と、文政二年（一八一九）の庚申塔が現存しており、昔の往還の名残りを今にと

どめている。なお同所には、もう一基の道標があつたが、現在は祥雲寺の境内に移されている。その道標は石地蔵をかねた明和四年（一七六七）のもので、正面に「右岩ヶ崎、左仙台」と刻こまれている。

祥雲寺には、文政二年（一八一八）建立の一切經藏がある。この内部は一切経書架の二層の櫻閣が、一本の心柱を中心に構築され、回転する仕組みとなっている八角形の転輪藏である。このような形式のものは、県内では、盛岡本誓寺のもの（文政九年）と二つだけであり、まことに貴重な文化財といえる。

さて、台町で国道に合流した旧道は、そのまま、国道沿いに願成寺・八幡神社を左にながめながら、宮坂町・大町と通過し、地主町の一関郵便局前を左折して磐井橋を越える。そしてすぐ橋のたもとを右に折れ、旧鍛冶町を通じて宮前町でふたたび国道に合流する。そして、宮下町で配志和神社の参道と交叉した所に、寛政八年（一七九六）の道標と、その付近に、文政二年（一八二九）創建の延命地蔵堂、文政七年（一八二四）の金毘羅大権現供養塔などが建っている。丸味をおびた道標には、「奥州・百坐の内、配志和神社、從是五丁余」とあり、その周囲に、仙台・松島・唐釜・金華山・正法寺・中尊寺・高齋・達谷草・五甲縣布・須川温泉からの里程が詳しく記入されている。

ここから約五〇〇m北進した山目町の一・二・三丁目は、県道一関大東線の分岐点を中心とし、部分的にはあるが、切妻を国道に面し、一階に格子戸をもち二階に格子窓を張出した家が数軒現存しており、藩政時代の宿場町の面影が残っている。一中里村史風土記一をみると、「一、山目町、丁數七丁・抬五間、家數九拾五間、但し、駅馬中里村山目村の内に御座候得共、往還駅場にては山目町と通用仕り候、御百姓人數持高の方にては、中里町と書上仕来申候」とあり、中里村の山目に宿駅が置かれていたことが知られる。しかも、ここは東山の松川・長坂に至る脇往還の分岐点でもあった。

一関から平泉まで

一関市との境から平泉までは、大体、奥州道中が国道四号線に沿って走っていた。市境から約五〇〇m北進した大佐の辺は、国道の東約一〇〇mの所を旧道が走り、そこに、一里塚と松並木があったというが、東北本線の開通抵觸工事によって撤去され、現在はその痕跡すらとどめいない。

旧道は、さらに約一km進んで国道と分れ、佐野部落を通ってふたび国道と合流する。そして、平泉の五方鎮守の神を祭った祇園社（八坂神社）を左に、王子諸社を右に見ながら北上し、太田川を渡って、約二〇〇m行ったところで国道と分れ、や泉駅前を経て古い町並に沿って進んでいる。途中の左側の田畠の中に、特別史跡の無量光院跡があり、その敷地内に、里塚が現存し、その上に、老杉がそびえている。そして字花立には、敵美や東山へ通じる道の分岐点があり、そこに文化五年（八〇八）の已供養碑が建っている。

この古い町並に沿っている旧道は、字坂下で国道と合流し、衣川橋を渡つて約五〇〇m北進した所で分れ、衣川村の潮原部落に入る。その間、中尊寺月見坂入口の右側と衣川橋の手前約二〇〇mの左側に地蔵が鎮座している。前者は、中尊寺の表登り口の案内として、明和六年（一七六九）に建立され、後者は、裏坂登り口の案内として、天保二年（一八四四）に建てられたものであるが、現在の位置は若干移動されている。

平泉から前沢まで

葦原屋根の家が数軒残っている衣川村の潮原部落から、旧道は国道四号線の左側約二〇〇mの所を北上するが、總て付近は、東北本線の工事によつて旧道が消滅し、それまで残っていた他の一里塚も消滅した。旧道は新城から塔ヶ崎の白鳥神社の前を通り、五十人町の所でほとんど国道と接するよ

うになる。そして、国道右側の丘陵南端の中腹に西岩寺がみえ、そこには、文化二年（一八〇五）、西岩寺九世唯峯不白和尚が勧請建立した五百羅漢と十六羅漢がある。

五百羅漢は、昭和二十四年（一九四九）の火災で四七七体を焼失し、現存するもの二八体、極彩色の木製坐像である。現在は、境内に設立された収藏庫に保管されている。十六羅漢は石造であり、うち三体は首が落ち、一体は頭部が半分欠け、残りの一一体は完全なものである。また、山下の靈棲寺は、伊達忠宗の九男宗章の菩提所であり、万治二年（一六五九）八月二八日、飯坂内匠頭（宗章）に宛てた伊達綱村の知行充行状を所蔵している。

さて、旧道は前沢町内を三日町・七日町・新町・二十人町と北上し、寺領で国道と分れ、ここから水沢市折居に至る約二・五kmの間は、国道の左側約一〇〇mの所を通っている。

前沢から水沢まで

前沢町の境から、約三〇〇m北上して国道に接した旧道は、折居宿の中間から西北に進み坂を登って上台に出る。この区間は旧道の状態を良く残している。この上台の坂の中を北上し、大深沢・堤尻・竜ヶ馬場を経て、水沢袋町で国道と合流する。そして、横町・大町と進み、ついで立町のほぼ中間に本陣があつたが、安政六年（一八五九）の大火で焼失し、現在は普通の家が建ち並んでいる。この立町から川口町に右折する角に、上伊沢郡の代官所があつたが、これまた現在は宅地となって、その面影はない。

一方、日高神社の境内には、宝曆二〇年（一七六〇）の馬頭觀世音と、天保五年（一八四四）の庚申塔の道標が二基ある。前者には、「右ハせんふく、左ハ衣川道」とあり、後者には、「右ハせんほく、左ハけわひさ」とある。いずれも、元の位置から移転されたものである。なお、元保二二年（一六九九）の「上伊沢松園」の文によると、袋町の手前と不斷町の北方に、

一里塚が記入されているが、ともに確認できなかつた。

さて、不斷町をすぎて十文字の所で、旧道は国道と分かれ、右にう轉してふたび国道に入る。その中間地点から、北上川に向って、江刺への道が分歧している。この十文字から再巡橋にかけて、国道は西北に向って進んでいるが、旧道はそのまま北進し、再巡橋に通じていた。この間、古くは胆沢城跡の外郭線（方八丁線）に沿いながら、鎌守府八幡の前を通っていたとする説もある。方八丁線に至る手前に、尼ヶ門堂があり、ここには、元の位置から移転されているが、「左金ヶさき道、右ゑさし道」と記された、元禄五年（一六九二）の道標がある。再巡橋に近い旧道の左側の佐倉河八幡には、胆沢川の川留宿が現存している。これは、胆沢川の増水や氾濫によつて通行不能になると、川留されたので、通行人の一時しのぎの旅宿であつた。現在、旧肝入高橋家の離れ座敷として、文政年間（一八一八—一九）の一室が残されている。なお、現在再巡橋の架設されている胆沢川は、正保（一六四四—四七）ごろまでは徒歩渡りであり、万治（一六五八—六〇）ごろから舟橋、あるいは渡し舟が利用されたようである。

水沢から金ヶ崎まで

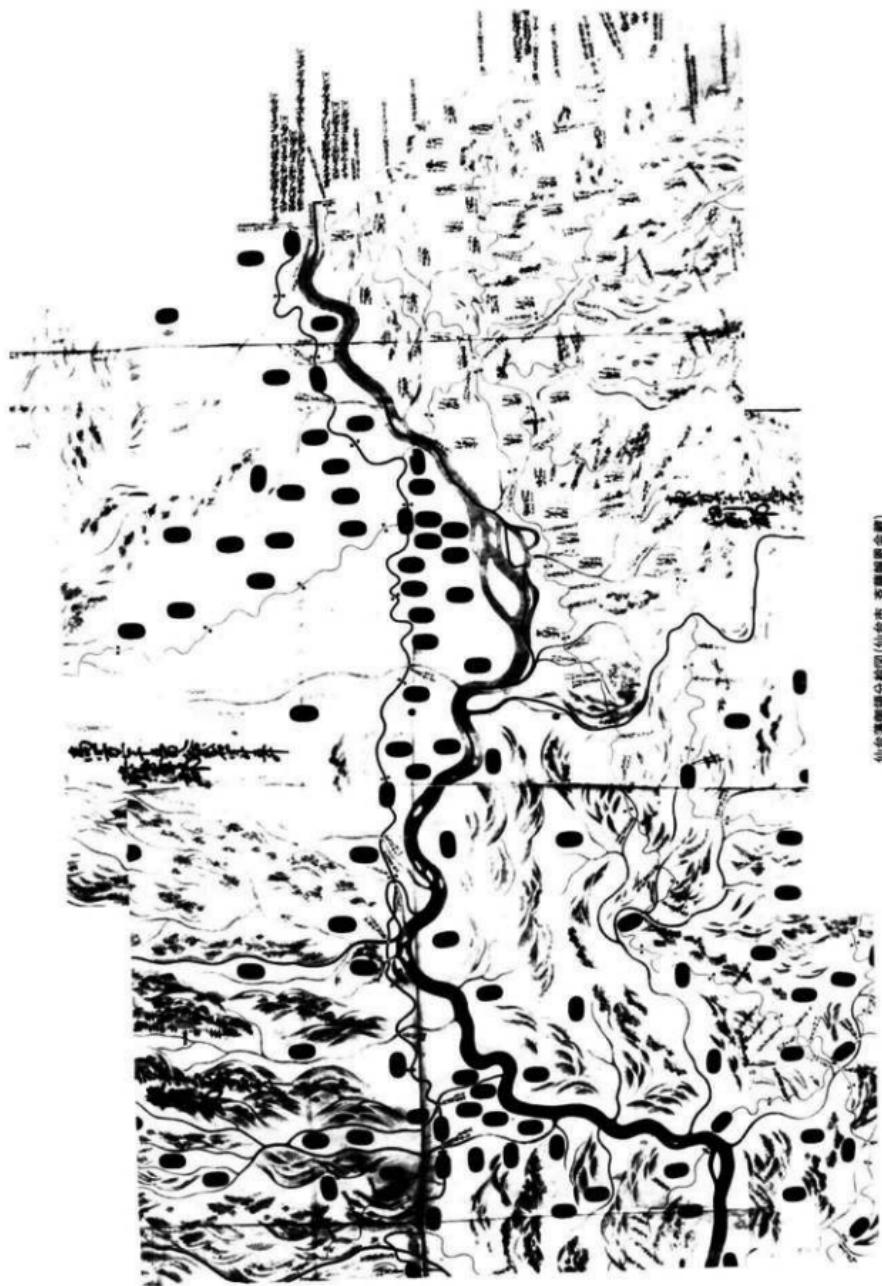
水沢との境の再巡橋から国道に沿つて北上する旧道は、金ヶ崎宿に入る手前の安養寺の所で、国道が右に大きくカーブする地点、すなわち、金ヶ崎字下城の所から左に折れ、すぐ右折して南町に入る。一方、安養寺下で国道から右折する道は、仙台藩の御蔵場に年貢米を輸送する馬の通つたところである。

さて、南町は大町氏の領り足絆一八人がいた所であるが、この南町に入つた旧道はすぐ右折し、さらに左折し、また右折して国道に合流し、そのまゝ北上する。そして矢来で国道と分れ、清水端・三ヶ尻・瘤木と進む現在の町道が、江戸時代の奥州道中である。この旧道を北進すると、清水端に一里塚

が残つてゐる。塚の南面と北西隅の一部は削り取られてゐるが、向糸七・五三・高さ二・七〇の塚の上には、高さ約四〇〇の老杉がそびえている。これと対をなすもう一基の塚は、明治中期まで、道路の左側にあつたというが現在は破壊され、その裏跡すらとどめていない。

さらに、旧道の右のかなたに、三ヶ尻氏の居城であった中世の丸子跡を見やうながら北上すると、三ヶ尻小学校の付近に、十三本塚と寛政一二年（一八〇〇）の飢渴供養碑が残つてゐる。そして、水沢館主留守家の足輕二〇人が居住していた瘤木付近までは、舗装された道であるが、ここを越えて山中に入ると、未改修のまゝの旧道が、三ヶ尻地内最北端の小倉沢付近までつづいてゐる。この山林一帯は、現在、三義製紙会社の所有であるが、その中を通つて奥州道中は、昔の面影をよく残してゐるといえる。しかし、それ以北の北上市相去町大倉沢につづく旧道は、篠原などにおおわれて、その痕跡を把握するのが困難な状態である。なお、この山中を通る旧道が、現在の国道四号線に切換えられたのは、明治二二年（一七八九）のことであつた。

仙台市地圖(仙台市、齊藤龍藏会)





一関市 旧奥州道



一関市 豊吉の墓



一関市 好樂寺一切經藏



一関市 賑成寺 木造薬師如来坐像(県指定)



一関市 豊隆神社



一関市 配志和神社



平泉町 無量光院跡(一里塚)



平泉町 高館義經堂入口



平泉町 中尊寺 地蔵(明和六年)



平泉町 中尊寺 木造一字金輪坐像(圓文)



平泉町 北上川渡舟場跡



前沢町 森下付近旧道



前沢町 白鳥神社



前沢町 西岩寺 十六羅漢像



前沢町 西岩寺 五百羅漢像



前沢町 雲桃寺 高野長英母堂の墓



水沢市 新屋付近の旧道



水沢市真城 一里塙



水沢市 山崎塗左エ門刑場



水沢市 日高神社境内庚申塚



水沢市 水沢城跡



水沢市立町 御本陣跡



水沢市立町 代官会所跡



水沢市佐倉河 八幡神社境内石碑



金ヶ崎町南町 旧道はここから西へ
まがり、そしてすぐ北へ向う



金ヶ崎町三ヶ尻 銀通供養碑(宝政十二年)



金ヶ崎町三ヶ尻 十三本塚



金ヶ崎三ヶ尻 一里塚



「相去六里道之全図」(元禄十二年五月二十四日)のうち相去番所団
浅水末男氏蔵

盛岡藩内における街道の道筋は、正保四年（一六四七）の公儀へ提出した絵図の控松図である「南部領絵図」（南部家旧蔵本）が初見である。これ以降の同類の絵図では、寛文本・元禄本などがある。これらの絵図によると、盛岡城下から藩境鬼御番間の里程は、十二里十丁四十六間と記載されている。

仙台藩境の相去（現北上市内）から、盛岡城下に至る街道について概観的なるルートは、上記の絵図によつて判読出来、その詳細については、代官所管内ごとの検地絵図である「通絵図」及び各村絵図（これらの絵図の製作年代は元文期・天保期・安政期・慶応期・明治期が多い）で状態を知ることが出来る。

江戸時代の街道の幅員は通常では三間幅、それに、左右外側に並木土手代約四尺、更に二間程の除き地からなるものと考えられる。（註一）

北上から盛岡間の道程は、藩境の鬼御番所から黒沢尻・花巻・石鳥谷、郡山口詰の諸駅を経て盛岡城下仙北組丁の外形に至り、それから仙北丁、ここで新山舟橋を渡り惣門改御番所（遠野街道分岐点）をすぎて鍛冶丁駅所に至るのである。ここから東州道は中津川の上ノ橋を渡り、本丁（小木街道分岐点）→四ツ家→三戸丁（鹿角街道分岐点）→上田組丁の外形で城下を離れ、茂民→沼宮内駅以北へ通じてゐるのである。

南部領内一里塚の元標は、盛岡城下の鍛冶丁中程に所在した。南部氏による盛岡築城と城下町が全く整備されたのは、寛永十年とされるが、城下の街道筋はいち早く、中津川に架設された上ノ橋の慶長十四年十月在銘の青銅板宝珠（国指定重要）によつても明確なよう、慶長期には完備したものと考えられる。公儀の命令によつて一里塚が築造され、その完成した慶長十五年（一六一〇）代と一致し、これによつても北上・盛岡間の街道が全く完成し

たものと云えよう。

しかし、明暦三年（一六五七）、領内の奥州道中のうち、特に盛岡以南については、藩主南部重直によつて路線改修と、松並木の植栽等の整備が行なわれた。（註二）以来、再三の改修・橋梁（土橋など）の整備もあって、事實上は、前述正保絵図に示された里程には変動があるが、公称里程の改訂に関する資料は今回確認出来なかつた。

参勤交代制の確立によつて、盛岡以南は、本陣・御飯屋・宿駅・伝馬そして番所・外形も漸次整備された。これが江戸後期になつて、特に寛政七年以降から文化・文政期、更に安政年間と、東北諸藩による北地警備に関連して公儀諸役人の往来が頻繁となつて、各宿駅の受入体制が充実したと考えられる。各郷村も多大の工夫をもつて街道の保全、伝馬役に奉仕している。

江戸時代後期において、北上・盛岡間の旧道路線の変更はない。明治になって名称は陸羽街道（函館街道）と定まり、明治九年、同十四年の明治天皇東北地方御巡幸の時期において、大規模な街道の新改修があつた。その後、同二十年代には、はゞ現状の国道四号路線に道路が変更されている。この路線の更改によつて、北上・盛岡間においては、特に国道四号線から除外された北上市内の黒沢尻・上野町→二子字塚根間、同市成田部落→花巻市桜町間、波町二丁町字古館付近については、部分的にはあるが、旧道の状態が良く保存される結果となつた。また、石鳥谷町内を中心として慶長期の旧奥州道中筋が、幸いにも田園地帯で旧状が比較的良好に保存されていることを特記したい。しかし全般的には、この区間の旧道は沿線各市町村の市街化部分をも含めて殆ど現在の国道四号線上に位置しており、岩手県内においては最も交通量の過密地域であつて国道四号線の道路拡幅工事、加へて都市計画事業等、開発行為も盛んで、旧状の保存状態は良くない区域といえよう。

盛岡藩内街道並木について、「岩手県並木史」（田中喜多美編・昭和二十一年刊）につきるが、明治五年七月二十四日付の岩手郡向中野（現盛岡市）

地内「並木松調」（戸長佐藤勘兵衛留書）によると、同村内分の街道筋には、「西側並木松三百五十八本。東側並木松二百九十本。」六百四十八本。右之通相改候處相違無御座候也」とある。うつそう天を覆う街道筋の並木はその後、漸次枯れかつ風倒木となり、更に戦時の伐採によって大きく変容した。

前記佐藤家の昭和二十四年十月の「向中野地内並木松現存調」によると、川久保六本。地蔵田五本。古屋二本。小薙なし都合十三本。と、實に驚くべき減少率であったことを記しておく。

北十一盛岡間の旧道関係の文書、記録類として主なものとして、次のものがあげられる。

書名	筆者等	備考
増補行程記 下 寛延年中 陸奥州駅路図	清水秋全編	
同 写本 〔從武州江戸東州盛岡玄東山道中通 道中行程記〕寛政十二	本堂親知 大森義詮編	東北大學所蔵本 太田孝太郎旧蔵本 盛岡市公民館蔵
邦内郷村志	星川正甫編	
公園史（地理志）	阿部九兵衛編	
盛岡砂子	横川良助編	
盛岡砂子	盛岡市公民館蔵	
鶴村古実見聞記		
内史略		
南流藩家老底日誌 (諸法令・仰出・諸願訴関係)		

まだ、仙台往来本「奥道中歌」（文政二）、「於曾山山露」（仙台伊勢屋半右衛門惣）などは、盛岡城下木津屋・巻兵衛取次本で、盛岡領内に流布したものである。紀行文として高山彦九郎「北行日記」（寛政五年）、吉田松陰「東北遊日記」（嘉永五年）、平沢相山漫遊文章「游東唐」（寛政二年・江戸須原屋刊）は北上と盛岡間街道筋の情景を寫す資料である。

1・2 「岩手県並木史」 田中喜多美（昭和二十二年）



黒沢尻町付近（慶應元年・黒沢尻通絵図による、盛岡市公民館蔵）

仙台・盛岡藩境における旧道は、現在の北上市内の相去・鬼柳の四道上を通っている。盛岡藩主木曾富治の「江戸・盛岡間行程記」(寛政十二年)に、

從江戸盛岡迄法里鬼柳越覽

、道程一百三十九里(二日五)

一、里塚百三十八

二、里塚九十二、雜

相去町

町中左ニ境置所アリ故重也

就是盛岡宿領

鬼柳 和賀郡

三里二十二丁(往花巻へ)

宿・南人口姓形也、町人口門アリ。

新町・本町

町之内左ニ御坂山アリ。町北山口左ニ御番所アリ。是仙台トノ御番所也。御番所後ニ白髮人明神之宮アリ。町出口御振櫓シタル十手千門アリ。出抜テ小溝アリ十幅也。御定盛岡入口御番所左石左門ニアリ。と、その状況を説明してある。

と、その状況を説明してある。

北上地方の古い奥州道は、和賀町岩崎の岩徳寺五代坂を通りて南北に通じていた。この往還路については、慶長期に新しい街道が定められて、これによって盛岡藩は、寛永七年に鬼柳伝馬所を設置し、翌八年には御番所を定めている。一方、仙台藩では、明暦二年に相去御番所を建設して、奥州道中を「番所改め」したのであった(註『北上市第四卷近世編』)。現在、国道沿いの藩跡には標識が建っているが、今では一本化した町並となつて、両側の跡も全く残っておらない。但し、藩境界は旧状のまま保存されていることは特記すべきことである。

和賀川の舟場跡は、和賀川の河川敷が移動して、往時は現在の流域よりも北方に位置しておった。そのため、今は農地及び一部宅地と化してしまつてゐる。

北上市内の中心である黒沢尻町は、北上川河岸場・藩の御廻場、川舟の舟場などで発達したところであり、前掲の行程記によつても、此所ハ非駅所。東側ヨリ花巻道ノ通り間之宿也。依ア止宿之時ハ南北ニ懸立也。ある。しかし、往来筋として、和賀川の川事故等不測の事態に備えて、それに対処する、施設として本町「鏡屋」が御本陣に定められて御用を勤めていた。また、同町には「鬼柳・黒沢尻通代官所」が置かれたが、いずれも遺構施設内容はわからない。なお北上川筋の渡舟場跡についても河川敷の改修等によつて判然としない。

旧道路では、上野町内の国鉄東北本線を横断する約二百米の範囲は、当時の原状のまま良く保存されている。

二子の坂根一里塚と、成田一里塚は、共に良好に保存されている。

○花巻市

向小路(現町名は桜町)の足軽同心の尾敷建物は若干遺存する。北上市成田部落からこの地点に至る区間の旧道は、明治になって新国道の設置で除外された区域であつて、比較的旧状のままである。旧市内に入つて、豊沢町・

里塚があつた。この、里塚は、整備された好一対の一里塚で、紀行等にも紹介された塚であったが、今は、全く痕跡がない。かつて、花巻城下は、領内の産物番付でも知られた和華・花巻土人形などの産地であった。町並は、武家屋敷街と、庶民街と繁然と区別されていたが、昭和になって、戦災とその後の大水害等に遇つて市内の山積ある建築物・社寺・諸施設、そして多くの文化遺産を失つてしまつた。今、花巻市は、旧市内中心街は都市計画整備事業によつて復興・新しく、往時の状態とは全く一変した。

○石島谷町

江曾一里塚は、東側の、基が保存(岩手県指定史跡)されているが、好地里塚は破壊された。かつて石島谷を中心とした道路は高底差こそあるが、南は花巻市宮野日地内から、北は紫波町陰沼に至る延長約十四秆の区間は、ほ

ば直線的に整備された道路で、松並木も極めて美観を呈し、領内でも他に例を見ない整備された代表的な街道であった。こゝも、開発によつて、並木の松も殆んど伐採と立枯死で、その面影は全く失なわれてしまった。

南部杜氏のふるさとで、江戸時代から酒肆・酒造屋の多かった石鳥谷は、延宝六年に駅所が置かれた。こゝはまた、南部煙草の特産地、大迫への街道の分岐点であった。今、石鳥谷町の旧道町並は、国道拡幅等整備事業が実施されて旧状を失つた。

○紫波町

稗貫郡境の大潤地区に郡境塚列が遺存している。紫波町に入つて滻名川に至る。前掲の本堂親知の行程記に、「滻名川へ歩渡也。此川洪水ニハ難所也。……中略……湯瀬川橋アリ。……中略……小坪川歩渡也。日詰新田町南入口前ノ流ナリ。小坂ノ如シ。然レドモ洪水ニハ通路止ル事アリ」。南部領内の奥州道中に、土橋がすくなく、未だ相当箇所の「涉渡り」の場所があつたことを示している。今日ではその跡はたゞせない。この小坪川を越えて、日詰（＝郡山駅という）に至るのであるが、日詰旧市内の町並は火災等によつて全く江戸時代の様子を偲ぶ建造物遺跡は失なわれている。この日詰郡山駅は、花巻の駅制と同様に、獨特な駅定によつていた。すなわち「上十日」は上町の当番、「下十日」は下町（以上二町町地内）。そして「中十日」だけは日詰町を夫々駅所と定めていた。即ち月内三旬を輪番分担の業務で勤めた宿駅であった。また、この日詰は、志和稻荷街道及び遠野への分岐点である。二日町について、前掲の行程記に「左右ニ御飯屋アリ。右ヲ東御飯屋ト云フ。是御本陣也。常ハ御代官勤番ス。左ヲ西御飯屋ト云フ常ハ御典奉行動番ス」とある。日詰には、藩の穀御蔵があつて、北上川舟運の寄留地でもあつた。また、八戸藩領飛地である志和三ヶ村への入口もある。そのため、商業交易の中継地としても栄えた町でもある。しかし、今、その御蔵も御飯屋跡もそして、豪商の居構・舟場跡もすべて湮滅してしまつてゐる。たゞ



紫波郡日詰付近街道図(慶応元年)

し、この「日町」以北、現古跡地内の旧道は、一部良好に保存されておる場所がある。

3. 矢巾町

赤沼川に架る三枚橋にはその遺構である橋脚柱跡が川中に遺存している。旧道は、国道の拡幅工事によって、往時の面影は殆んどない。道路は徳丹城跡（国指定史跡）の外郭を南北に通っている。

4. 郡南村

村内の旧道は国道改修工事によって全く状態をどめておらない。文化九年九月、駅が置かれた見前町、また津志田は文化七年に遊廓街が設置され以来、吉田松陰の『東北遊日記』で「過津志田村、方舟道樹、廢良田、新起坡塚數十家、南部園事、実町候哉」に述べたとも、近年の開発によって全く変容した。僅かに大國神社境内に昔をしのぶ資料がある。川久保は、盛岡城下から八戸藩飛領地志和町に至る街道の分岐である。(この別名「稀荷街道」)には、現在でも一溜に松並木及び里塀が保存されていることを付記しておく。) 前掲の行程記に、「川久保、塚根ニ茶屋一軒アリ。酒肴・菓子之類、外、草鞋等ヲ完ル。コノ茶店之脇ニ道アリ。是ヲ志和街道ト云。志和稀荷ヘ參詣之道也。用、茶屋ノ側ニ稀荷之鳥居アリ。」と、その状況が記されている。現在、付近は市街化されてしまった。

5. 盛岡市

紫波郡都南村の川久保から北上すること約七百五十メートル、道路の東側に「殺生場」と俗称される刑場跡がある。今は、天保年間建立の供養石碑が遺存するだけである。

南仙北一丁目地内に盛岡城下の外郭と足軽同心組屋敷の町があり、近年までその屋敷跡が若干遺存していたが、今は名を残すだけである。この、足軽組丁を過ぎて仙北一丁目地内(旧町名)仙北町)に入つて御城下となる。江戸時代における盛岡の城下町の構成は、

1、「小路」名の地域は、武家屋敷街
2、「丁・町」名の地域は、庶民(商・職人)街

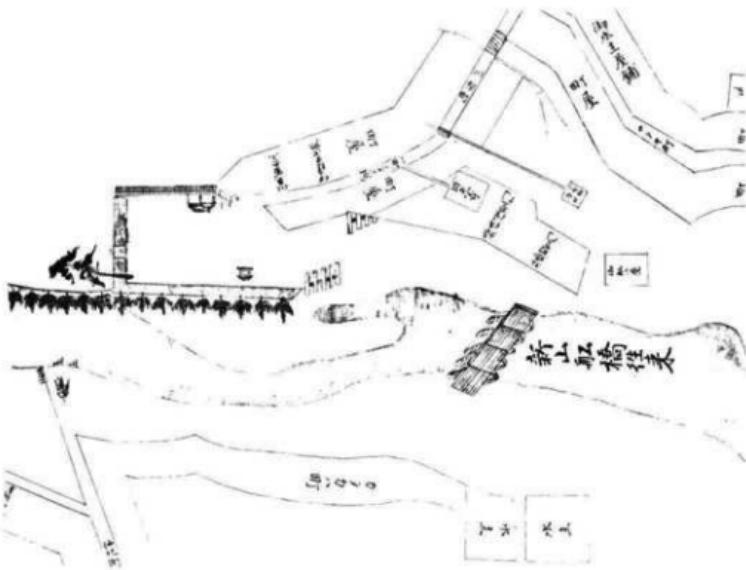
3、「組丁」名の地域は、同心・足軽組丁街と大別される。

奥州道中筋は、この中の、2、「丁・町」名の地域で、商店街等の町並が統く通りに設定されている。

この盛岡城下の旧道の道幅は、四間五尺(本丁八日丁など)~五間(只服丁・仙北丁など)が基準であり、現在も、旧城下町の道幅は当時のまゝの幅員である。この奥州道中筋は、旧町名でいうと、仙北丁(舟橋)~川原丁(鐘門)穀丁~六日丁~只服丁~細屋丁(札ノ辻)~制札場~鉄治丁(駅所・里所)~紙丁(上ノ橋)~木丁~八日丁~四ツ家(三戸丁口)~上田(組丁)を経て外形に至るものである。そして、外形以北の奥州道の道路幅は、三間であって、その並木敷は、一間三尺宛が見込まれていた。

西暦	年号	記	事	川止期間
1840	天保11	7月19日橋落ちる 8月19日橋引き	8月4日復旧 8月25日々	15日 6日
1841	天保12	2月29日橋引き 3月10日 6月29日 7月23日	3月9日復旧 3月17日々 7月3日日々	10日 7日 4日 1日
1842	天保13	2月23日舟橋崩16棟、鉄網、橋板 共に流れる。(26日より御用舟のみ通す) 4月30日橋引き 5月28日 5月2日 6月1日 7月4日 7月5日 10月3日	3月6日復旧 5月2日日々 3日 1日 1日	13日 2日 3日 1日 1日

(佐藤勝郎家書稿資料による)



新山舟橋付近図（盛岡城下絵図部分）文政期

盛岡の御城下筋で、上田足軽組丁、仙北組丁の足軽丁以外は商人・職人街等であって、現在では表構えを全く近代的に改造した店舗が殆んどである。

舟橋は、藩政時代でも特色ある交通施設であった。仙北町と城下の連絡路はこの舟橋によって連絡されていた。往時は、北上川の増水等によって、しばらく「川止め」があった。天保十一～十三年の三ヶ年にその例を見ると（別表）、天保十一年が二回以上、同十二年が四回以上、同十三年は五回以上であって、一回の「川止め」の最高期間は、天保十一年七月の十四日間に及ぶ川止めが記録されている。

新山川岸は、北上川舟運の起点である。かつては両岸に「水主」の屋敷が存在していたが今は無い。僅かに御用「御藏」一棟が遺存しているだけである。

穀町惣門は、盛岡城下の河南地域における第一期外郭の出入口に位置した御番所で、城下でも最も重要な「改御番所」であった。（現在、番所跡敷地北側境に石垣の遺構がのこっている）。奥州道中から分岐する遠野・大迫街道はここからはじまる。

盛岡城下の「駅所」と「里元標」は銀治丁地内に所在した。しかし、この施設は、現在全く失なわれている。

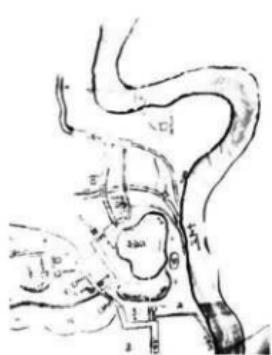
道中筋の中津川にかかる上ノ橋は、現在永久橋となっているが、欄干等は木製で、往時の姿を復原し、慶長期の青銅擬宝珠（重美）はそのまま取り付けて保存されている。

本町通から「塩の道」或は「鉄の道」と呼ばれる三陸沿岸に至る小本街道が分岐する。そして名須川町に舛形跡が残っている。

旧上田足軽組丁に一軒だけ足軽同心屋敷が遺存している。城下のはずれに設置されていた「舛形」は撤去されて、今は市街となつてその面影は全くない。



南部領總絵図・北上一盛岡間(正保図) 盛岡市公民館蔵



紫波町日詰・二日町付近図



花巻市二枚橋付近～石鳥谷町八幡地内 八幡寺林通絵図(天保年中)
上段の街道は慶長期奥州街道筋
下段の街道は新奥州道である



盛岡市仙北町～都南村川久保付近(向中野通絵地図(慶応元年))



北上市相去町 岩ノ目一里塚



北上市相去町 這分碑



北上市 染黒寺



北上市藤垂町 這分碑



北上市 成田の一里塚(街道西側塚)(県指定)



花巻市桜町 向御組同心町跡(左側茅葺民家は同心屋敷跡)



花巻市塩沢町付近



花巻市 奥州道中並木松「なごりの松」



石巒谷町 好地旧街道一里塚



石巒谷町 紫波郡境塚



石巒谷町 好地一里塚西側の一基は昭和
27年とりこわした 東側の一基は大正8
年11月民間に払下げられまもなくとりこ
わした



石巒谷町 八幡宮の遺景



石鳥谷町 江曾一里塚（県指定）



紫波町赤石志賀理和氣神社参道脇所在追分
碑「是信御旧跡みち」
(天保5年8月14日)



紫波町大洞村内 伝藤倉道（旧奥州街道）



紫波町二日町 走湯神社



紫波町二日町地内



紫波町日詣 大日堂境内の供養塔



紫波町 德田伝法寺通代官所役屋跡



矢巾町 北都山 三枚橋



紫波町 十日市付近街道跡跡



矢巾町 德丹城内郭南門跡



矢巾町間野々 一里塚跡(北方を望む)



矢巾町 狩森古墳(県指定)



都南村 津志田 大国神社社殿



都南村 大国神社の駄馬



都南村西見前 一里塚



盛岡小鹿刑場 供養碑 盛岡市南仙北1
丁目18



盛岡市 明治橋付近 御藏



盛岡市紹屋町 畏程の元標跡



盛岡市 宗電寺 十六羅漢像



盛岡市 大慈寺 大慈清水



盛岡 無門跡 盛岡市南大通2丁目



盛岡市牛越川 牛越場 愛宕町側から望む



盛岡市 三ッ石神社(岩手の地名のおこりとなった石)



盛岡市 東觀音寺境内 鏡死供養碑



盛岡市 報恩寺 五百羅漢像

(3) 盛岡市上田と二戸市

盛岡以北の奥州道中は、現国道が北上川の西岸を北上しているのに對して、北上川の東岸上田を通つて北上しているのはじまつて、現国道と離れた別の道を通つているところが大半で、旧い道を改修して現国道となつてゐるところは少ない。その上、旧道には急な山坂が多い。従つて、旧道の面影を残しているところも比較的に多いが、中に廃道となつて、道路のあったところに笹や雜木が生い茂つて、通行困難なところもある。このような山坂を通る旧道は、盛岡より南で、本路の幅二間と土手分四尺、左右両側の除地各一間として、少なくとも四間四尺あつたとある（『岩手県史』）が、盛岡以北でも渋民・川口間のような平坦なところはそれに近い道路の幅員があつたとしても、山坡の道路は路幅が二間あつたと推定出来ない狭い道幅のところも多かつた。このことは、現存する道路の左右両側の一里塚の間隔からも云えることである。

盛岡以北の奥州道中について、漆戸茂樹の『北奥路程記』があり、幕末の記録であるが、旧道の様子を知ることが出来る。それをもとに、藩政時代の領内絵図や諸記録を参考に、実地に当つて踏査した。なお、「明治九年御巡幸記」は旧道の様子についての記述があり、参考になるところが多い。

盛岡城下町を出ると、上田同心丁があり、その北のはずれが、「外形」になつていて、現在、道路も拡幅されて、昔の面影はないが、「上田通代官所絵図」によると、現在の高松郵便局のあたりである。放送局の坂を上り、高松の池を右に見て、北に進むと、高松神社の坂となる。ここに茶屋があり、高松神社は藩政時代は、「庚申堂」「庚申社」と云われているよう、「庚申塔」が數多く現存する。この付近の道路両側に昭和のはじめまで松木がよく残つていたが、現在は全くない。なお『奥筋行程記』（盛岡市公民館蔵）によれば茶屋付近には漆・杉・松並木ありとある。



盛岡城下上田・組丁・外形（上田通絵図）

黒石野手前の左京長根の一里塚は、道路西側の一基が、修道院の敷地内に残って、文化財に指定されている。この附近の西側には松並木が良く残っている。黒石野を過ぎると「座頭転し」といわれた急な山坂となっていた。

明治九年（一八七六）の明治天皇巡幸の際、山の斜面を削って平坦な道路を約二キロメートル作り、坂の上り下りもなくなった。この道路も松園住宅団地の建設に伴って、拡幅され、昔の面影はない。

次いで、道は長坂の急坂な険路にかかり、明治天皇はこの坂を越られるに当り、馬車を降りて、乗馬して行かれたとある。しかし、この長坂一帯の丘陵は削平されて、松園住宅団地となつて、様相が全く一変している。

長坂を過ぎて、小野松観音山麓には、小野松の一里塚があり、現在も一基残って、文化財に指定されている。一里塚を過ぎて北上する旧道は、四十四田ダム用地となつて、大巾に変更、改修されて、ところどころに旧道の面影を残すにすぎない。笹平の一里塚はダム用地の中にあり、湯水期には残る西側の一基が、その姿をあらわす。

笹平を過ぎて、二つ坂から千本松にかけては旧道の面影を残している。ここに千本松という、木の根元からいくつかの枝の生えた木があつたが、菅江真澄の遊覧記の項は既に枯れていた。「奥筋行程記」には「此松身木本にて枝悉クサカウテ見事ナリ」とある。柏木平から北は道路幅も拡げられ、舗装もされている。渋民部落に入る手前の一里塚は、大正十二年調査の際には、

その名残を留めていたが、現在は平らな雑草地となつて、完全に消滅している。

渋民は啄木の出身地として有名であるが、明治九年の御巡幸の記録に「寒露殊に甚し」とあるが、渋民から川口までは平坦地が続くので、山間部と違つて道路の幅員も規格に近かつたことが、草木の僅に残る二基の一里塚の間隔によつて、推測される。その道路も現在の国道とはほぼ同じであるが、旧道の面影はない。屋並も新しい家屋となつて、昔のものはなくなつている。

が、啄木記念館の敷地内に、渋民の街道沿いの江戸時代の民家が移築復元されて保存されているのは注目に値する。なお、渋民は盛岡以北の最初の宿駅で、藩政時代民家が相当建並んでいた。その宅地の地割図が現存している。なお、宿駅の入口と出口には柵戸があった。

渋民を過ぎて、新塚の一里塚は東側のものが一基残存して、文化財に指定されている。状小屋付近には、現国道とは別に旧道が一部残存し、馬場付近には松並木が一部残っている。巻廻部落の東側に巻廻神社がある。「邦内郷村志」に金勢大明神とあるもので、真澄の「けふせはの」に「金勢大明神といふかん離あり。今は名にたかぶ石の雄元の形あまた祠におさめたるはいかにとどみ、近きころ益人とりらせたるをもとめ、いたし奉りてのちは、此里のこと處のやにと人のこたふるを聞いて、一間の高さところの机のうへに、黒かねのなきばかりのおはしかたをふたつ、みなくさりに付たるをいやし奉る。」とある。これについて古河古松軒の「東遊雜記」にも同じものが図示されている。現在、神社の神官の家にはこれと別な唐金の高さ二尺五寸の男根が祀られている。それに「天保四年癸巳歲五月吉日 願主浅井五兵衛 江戸浅草大門通伊勢屋彦助 源定吉作」と刻まれている。

寺林部落の手前の国道西側の比高三メートルの塚上に「一字一石經塚」の碑がある。

（表） 「大乘妙典全部
一字一石一札 供養」

（裏） 「安永七戌天三月十四日
明潤現実秀書敬白」

（左側） 为 四恩三有法界群生
前生父母六根眷属
（右側） 为 佛體無死無生魂魄
有緣無縁三界萬靈」

岩手町に入ると、草木の一里塚が、烟の中に少しの高みを残して、その所
在を物語っているが、それも消滅の寸前にある。西側のものはその所在地が
草むらとなつて残っている。屋並の多い川口部落に入ると、その北端に明円
寺がある。明円寺には、寛永廿一年の梵鐘が鐘楼と共に残っている。「奥州
南部上岩手郡河口村 柏樹山明円寺二世岩鶴建立是 旦那 藤原正家 田村

源之尉 大上 藤原家次 鈴木七兵衛 本願 喬前 干時 寛永廿一年中中天

三月吉日」とある。その外に、元禄二年の銘のある香炉と花立、明和九年の
銘のある半鐘、大明元年の銘のある燈籠があり、古跡ある寺である。

川口部落より北上する旧道は、現国道に沿つてはいるが、現国道と連つて
いるところが大半である。川口部落を出でると、旧道はむかしは東側の
山裾を通つたらしいが「北奥路經記」では、明円寺のところから、直ぐに
北へ、現在水田となつてゐる低地に下り、越坂を上つて川口城跡に出て、雪
浦へと進んでいる。この旧道は現在水田の中の畦畔として残つてゐるにすぎ
ない。川口城跡は、中世この地方を支配した川口氏の居城で、天正二十年
(一九五二) 南部藩が破却した城の一つである。現在道路などで、現状破壊
が著しい。

雪浦から北に進むと、丹藤川を渡る。丹藤川は北上川の支流であるが、北
上川との合流点から水源までの長さは、丹藤川の方が北上川より長い、従つ
て水も豊富な川である。このような川を渡る旧道は、現在の国道のようない
い所に橋が架つていたのではなく、水ぎわまで下り、そこで橋を渡つて対岸
に移り、また道路まで上つたもので、その旧道は残つてゐる。

丹藤の北にあつた一里塚は、西側の一基は大半削り取れていますが、煙の
中に僅かな高みを残して、その所在を物語つてゐる。東側の一里塚は道路と
鉄道路線によつて完全に破壊されている。この付近から沼宮内駅付近までの
旧道は、東側の山裾の現国鉄線またはその支側を通り、沼宮内の町
の中はほぼ国道と重つてゐる。沼宮内は代官所の所在地で、代官所の建物の

一部は明治のはじめ沼宮内小学校に利用されていましたが、今は個人の宅地とな
つてゐる。沼宮内の北、新町の東側には稻荷神社、その向いに招福寺、大蔵
寺がある。その背後は沼宮内城跡で、これも天正二十年南部藩によつて破却
された城の一つである。この地方を支配した沼宮内氏の居城であった。最近
この付近から、室町時代の菊花双雀鏡が出土している。

新町のはずれに、一里塚があつたが、現在消滅して、民家が建つてゐるが、
その家は「塚」の屋号をもつてゐる。それから少し行くと、旧道は現国道と
分れて、右側の山裾を迂回し、また現国道、鉄道路線を横切つて川原本部落
を通り、再び現国道と一致する。御堂駅まで、現国道と分れて、御堂観音
の下を通り、山坂を登つて黒羽松に通る道を行くことになる。御堂観音は北
上山新開法寺まで、正覚院がある。源義家が、湯していた際、弓羽をついて
泉を湧出させたという伝説のある「弓羽清水」があり、北上川の水源とされ
ている。その由緒を書いた文久元年の碑が現存する。また本尊の観音も義家
に關係ある持仏の小観音像といわれて、現在旧藩主南部氏に所蔵されてい
る。仏像の正確な製作年代は公開されないので明らかでないが、正覚院は天
台宗の寺で、平安時代初期の開拓時代に創建されたものであろう。現在の社
殿は最近焼失後建立されたものである。

御堂観音の下を通る山坂は旧道の面影を残してゐる。この道は最近の五万
分の一地図から消えている。そして、一戸町との境に一里塚が二基残つてい
る。東側の一基は岩手町に属し、西側の一基は一戸町に属している。共に比
較的良く保存されている一里塚である。この一里塚より黒羽松への旧道は、
現在全く使用されず、雜草が生い茂り通行困難である。黒羽松は馬不喰が旧
名で、それに因る伝説のあるところである。標榜から中山への旧道も一部は
全く使用されず、五万分の一地形図から消されている。中山の一里塚は西
側の一基が良好に保存されているが、雜木や雜草に覆われてゐる。ここも旧
道は廃道となつて使用されず、その西側に別の良い道が開通してゐるためで

ある。

中山より火行までの旧道は、改修されて現存も使用されているが、火行から小繫の里塚までの旧道は全く使用されず、五万分の一の地図からも消えている。この付近は巡幸記録に「山又山の果しなき地」といわれたところで、火行は冬旅人が凍死したので、ここに家を建て旅人の難を救つたといわれ、ところで、伝馬所が置かれた。火行部落はずれの林の中に「里塚が二基並んであるが、後に述べる藩領絵図作成以前の古い道の「里塚と云われている。

小繫部落へは寺の山坂の急な坂を下りて行くが、そこに小繫の里塚があり西側の一基が残っている。この「里塚付近は旧道の面影が残つてゐる。小繫部落は番所のあったところで、番所の場所は現在新しい民家が建つてゐる。奥州道中で城下より北方にある最初の番所で、仙台藩境の鬼柳に番所に比敵するものである。『岩手県史』には「領内の物資の交流と交通を監視する中間番所」と説明している。『奥州行程記』には「町並作りノ村ナリ宿入ロ左方御番所アリ女牛馬等改之」とある。

小繫から笛目子までは、小繩川沿いに平坦な道を進むが、笛目子から、現在の国道は、川沿いに岸壁を削って開通しているが、昔は岩壁が川岸に迫つて峡谷をなし、通行が困難であったので、道は山間に入つて、「高間館、赤羽根坂さては男転の嶮など、屈曲登降極まりなく、加うるに路面砂乾き石出



小繫の番所（高村正氏所蔵）

で、御巡幸中未だ曾つて見えた駆け足であった」（『御巡幸記録』）道を通つた。この道は現在北の方から川底の里塚付近までは、旧道が残つてゐるが、それより先、笛目子までの間は全く廃道となつていて道路も明らかでないところが多い。この間で川底の里塚は東側の一基がはつきり残つてゐる。西の山側は斜面で、はつきりしないが、樹木を刈り払えば、里塚に当る高みも残つてゐるかも知れない、その精細は明らかでない。破壊される可能性の少いところである。このようなところであるから、高屋敷までは旧道の面影も良く残つてゐる。高屋敷部落に入つて、駒木木宅は昔伝馬所のあつたところである。高屋敷から仁昌寺に行く途中に「追分石」がある。北から来た旅人への道となるべく、「右は山道、左はもり岡」とあり、文久元年のものである。この追分石によつて奥州道中も山道と大して要らなかつたことを想像させる。

小鳥谷駅付近は谷あいの平地も広く、旧道も現国道に拡幅されている。この小鳥谷付近の馬渕川、平糠川、根川の川床や川岸の第三紀層には多数の珪化木が埋まつてゐる。樹種はセコイアとシマモミが多く、ブナもかなりある。そのほかトウヒ・カエデ・カシ・ケヤキ・タブノキもある。保存良好で分布が広く、学術上価値が高く、国の天然記念物に指定されている。また、小鳥谷内地内藤島のフジの巨木は樹齢数百年と推定されるもので、昭和四四年の計測で、根元幹周三・六メートルあった。これも国の天然記念物に指定されている。

小鳥谷部落を出たところで、現国道は馬渕川を渡つて東岸に通じてゐるが旧道は西岸沿いに、野中部落を過ぎ、小姓堂へと山坂を登り、女鹿口を通つて、関屋へ下りて、現国道と合する。小繫から女鹿口まで来る道は前記の如く難路が多かつたが、この間の道も、小繫から直に山間に入り、山の尾根沿いに女鹿口に通ずる別の道もあった。その道にも二か所一里塚があり、二か所の一里塚共道路の両側に良好に保存されて残つてゐる。貞享の絵図も「北

奥路程記」も共に前に記した道路を示しているので、地元では更に古い時代の道ではないかと考えているようであるが、明らかでない。

関屋から一戸駅付近（城跡野と云われていた）は現河原と同じところもあるが、若干馬渕川寄りの道路が旧道で、現国道に対して、現在は裏道のようになっている。この旧道沿いには家の前、道路沿いに井戸もあり、旧道の面影をとどめている。諏訪野の一里塚は破壊されて、完全に消滅している。

一戸駅の西方約一キロメートルの丘陵の麓に「福寿山西方寺」がある。毘沙門堂といわれ、慈覚大師作と伝える阿弥陀如来像がある。毘沙門仏像は、三体あり、毘沙門天立像は一・八メートル、地藏菩薩立像は一・五メートル、阿弥陀如来座像は一・二メートルある。立像は、木彫で古代仏像の特長をもつていて、専門家の調査を必要とする仏像である。一戸駅から北、馬渕川に万代橋の間は字名は野田で、野田城跡といわれている。現在本宮龍太郎氏宅地裏の小高いところに、宝鏡院塔が七基存在する。この地の中世の武将一戸氏の墓と伝えられている。なお、一戸城跡はここより馬渕川を隔てた対岸の丘陵上にある。

一戸駅付近から万代橋を渡って、上町、中町と現国道と旧道は同じであるが、実相寺付近で、現国道をそれで、右側実相寺の前に出て、越田橋へと進んだが、その途中で、旧道の一部が不明となっている。なお、江戸時代より前には毘沙門堂の前を通り、中田橋を渡ったとも考えられている。実相寺には雄株がありながら、枝の一部に薙花をつけるイチヨウウカがあり、これも国の天然記念物に指定されている。境内には宝鏡院塔もある。

越田橋を渡って舞所といわれる浪打跡への登り口付近から鳥越觀音に通する道がある。鳥越觀音は慈覚大師作と伝えられる觀音を安置しているが、その真向は明らかでない。崖の中腹に洞穴を作り、そこに堂を作りつけている。規模は遠谷窟ほどではないが、洞穴の所在する位置は高く、そこまでの参道も長く、古代の創建と考えられるものである。

浪打跡の坂は急で、最高の頂を木の松山と称している。木の松山は古歌にもうたわれた名所であるが、宮城県にもある。この旧道は、昔の面影を残すばかりでなく、直上の近くに大道沢の一里塚が二基並んで現存し、保存も良好である。またこの頂上には「浪打跡の交叉点」が美しい縞文様を描き出している。露出している。もと海氷堆積層で、その地層中には、貝類をはじめ海棲動物の化石が多いことで、古くから有名で、国の天然記念物に指定されている。

浪打跡が二戸市との境界となつて、二戸市の村松に向って下り坂となる。この付近も旧道の面影を残している。途中に湧水があり、旅を疲れたを休める場所であった。村松の手前に蒼前の「一里塚」がある。東側の一基が一部削られてしまいが、残存する。塚の上には松と松が生えている。そのわきに菅前社があり、據札に「安政五年戊午（五月五日）」の銘がある。その向いに桜清水地蔵があり、その台の四角な石に次の如き銘が刻まれている。

（左）

一里塚

天下泰平
天保四年正月五日
大桑院
頃上新作
東岩

（表）

奉納大乘妙典六十六部寄進

日月清明安全

（左）

一里塚

天下泰平
天保四年正月五日
大桑院
一百五十里
九日町
湖野村

現国道に出る角の一带は「九戸城跡」で国の指定史跡である。九戸城は天正十九年（一五九一）、九戸政実が反乱を起し、豊臣秀吉の派遣した豊臣秀

次を大将として、蒲生氏郷、浅野長政などが参加した軍によって滅された城で、馬渕川と白鳥川の合流点に位置し、空濠を掘り、本丸、一の丸、若狭館・松ノ丸などの曲輪が造られている。本丸の一部に石垣が残っている。九戸城は戦乱後、藩主南部氏がここを居城としようとしたが、後藤岡に居城をかえた。

国道に出で、右側、九戸城の松の丸の一角に呑香稻荷神社がある。神社は往古羽黒派の修験であったが、天和二年（一六八一）呑香稻荷と号したとい

われ、南部藩主の保護を受けて社殿を建立され、社領も賜わっていた。この神社の境内に、神官小保内氏の茶室「楓陰舎」があり、幕末吉田松陰の友小倉鰐堂忘命して、小保内氏に身を寄せた際、この茶室を利用して、会稽社を創設し、教場として土地の子弟の教育に当った。

稻荷神社の前を過ぎ、五日町を通って、岩谷橋を渡るが、旧道は現在の橋の手前で左に曲り、白鳥川岸に下りて、橋を渡り、再び道は折れ曲って、現国道に出る。その旧道の五日町のはずれに一里塚があつたが現在は消滅している。また橋を渡ると右手（白鳥川南岸）の岩場に洞穴を穿ち岩谷觀音が祀られている。「三界萬景」とある正徳二年（一七一二）の供養碑などがある。白鳥川を渡って現国道に出るところに「追分石」があり、次の如く刻まれている。

（表）「右 もりおか
左 白鳥」（裏）

「左と左の往者安之
右之右之來者等之
安水乙木夏
大慈寺説撰
勝利重書」

橋を渡つて福岡の町に入るとすぐ右手に代官所があつた。明治のはじめ、代官所は福岡小学校の校舎に利用されたが、その後福岡小学校が現在のところに移転した。現在は二戸市長岡分氏の個人の住宅地となつてゐる。

少し進んで、西に入ったところ龍岩寺がある。龍岩寺はもと馬渕川に白鳥川の合流点の北東角にあつた。高山彦九郎の寛政二年（一七九〇）の「北行日記」に「川を白鳥川と号す、まべち川に入る、左りに廻りて巖壁の下に浅二十間斗り岩窟に三ツ石仏を安置す、寺門に入る、岩山の上に釣鐘堂有り寺を高沢山龍岩寺と号す。洞家也、」とある。天保六年（一八三五）の洪水で流出、今日のところに移つた。更に進んだ東側に善導寺があり、その前に街道沿いの井戸があり、今日も使用されている。福岡の町並に昔の面影を知る



九戸城の図（二戸市の文化財）二戸市教育委員会より

ことが出来ない程改築されているが、昔の建物もところどころ残っている。

なお、田中庄一氏のところには、藩政時代の町割図が残っていて、当時の町の様子を知ることが出来る。

福岡の町をすぎ堀野部落に入ると竹内神社がある。境内に柱の古木がある。なお竹内神社の手前の道路沿いの丘の上に、五輪塔が三基並んでたつてある。組合せに若干疑問もあるが、この地方の古い豪族の墓と考えられる。

堀野部落のはずれに、三戸へ行く奥州道中から八戸への分れ道があり、そこに追分石が建っている。記年銘はない。現国道はここから直角に北進するが、旧道は斜に馬渕川に向っている。この松並木の枝振りの美しさは有名であったと、「巡幸記録」にあるが、現在はその痕跡もない。

もとの長瀬橋の架っていたところに、橋脚跡が馬渕川の渓水期には見られる。そして、対岸の米沢の下平の川岸に、長瀬橋工事の際事故死した大工棟梁の碑がある。嘉永七年（一八五四）と刻まれている。

馬渕川の西岸に渡って、丘陵に向って行くとバイパスと東北線を横切った山麓に耕塚があり、そこが左は米沢、右は三戸の分れ道となっているが、そこに供養碑が二基あり、共に北から米た人の道標となっている。

(1)

千時承保廿年四月二日

(表) 南無阿弥陀仏
(右) 聖主長考ち祖參代
相前中
右へしもとま
左へふくおかみち
(裏略)

(2)
(右) 聖主長考ち祖參代
相前中
右へしもとま
左へふくおかみち

(表) 南無阿弥陀仏
(左) 宜曆中急七月廿五日

(裏) 二界禹墨

そこから、平坦な道を北に進むと、上田面に天保三・四・九・十年の鎌光供養碑がある。金田・部落に入り左手に八坂神社があり、境内に、延享五年（一七四八）の記年銘のある石燈籠がある。

新国道は東北本線の東側に開通し、旧道は東北本線の西側の町並を通っているが、現在は相当改修されているので昔の面影はない。金田・駅前のところで、旧道は東北本線の東側に渡り、現国道と一緒になるが、旧道は少し行って、直ぐ左手に曲り、東北本線をこして山坂にかかる。これが「北奥路程記」にある府金坂で、府金坂の外、雀坂、土堂坂等の登り下り屈曲した道路を通って、川口部落のある平坦地に下りる。

川口から釜沢部落を通って県境の九折の難所良坂にかかるが、その登り口までが岩手県で、あと青森県となる。なお、良坂の手前海上川が、藩政時代福岡通と三戸通との境界であった。

註「東筋行程記」は盛岡市公民館所蔵の旧南部藩関係の記録である。筆者は明らかでないが「北奥路程記」よりやや古い時代の盛岡以北の奥州道中の状況が記されている。



南 部 領 貞 事 図 (岩手県立図書館蔵)



盛岡市 高松神社の入り口



高松神社の庚申塔(明和元年)



盛岡市 上田一里塚(修道院の敷地内)



上田修道院付近の松並木



盛岡市 黒石野の旧道



盛岡市 小野松の一里塚(県指定)



玉山村 川又付近の旧道(手前は新道)



玉山村 岩平の一里塚



玉山村 千本松付近の旧道



玉山村 渔民の道路傍の井戸



玉山村 渔民の街路沿の民家(啄木の下宿した家)



玉山村 新藤の一里塚(県指定)



玉山村 狩小屋付近の旧道(左)と国道4号線(右)



玉山村 馬場の地蔵堂



玉山村 馬場付近の松並木



玉山村 奇林の一宇一石の経塚



玉山村 巻堀神社境内(男女石)



玉山村 巻堀神社神宮の家の祭壇



岩手町 草折の一里塚跡



岩手町 川口の稻荷神社



岩手町 川口の明円寺



岩手町 明円寺の梵鐘



岩手町 明円寺付近より川口城を望む(田の中の黒い駐道が旧道)



岩手町 雪浦付近の旧道



岩手町 丹藤の一里塚



岩手町 愛宕山と愛宕神社



岩手町 沼宮内稻荷神社と手洗石
(明和元年の銘あり)



沼宮内の沼福寺



岩手町 沼宮内城跡



岩手町 新町より戸部田への旧道



民部田への道路傍石碑(寛延四年の庚申塔あり)



岩手町 御堂の地蔵



岩手町 御堂観音付近の旧道



岩手町 御堂観音



岩手町 弓張の泉



岩手町 御堂の一里塚



一戸町 御堂の一里塚



一戸町 中山の一里塚



一戸町 火行の伝馬所付近の旧道



一戸町 小森の一里塚



一戸町 小森一里塚付近の旧道



一戸町 小森部落



一戸町 梶目子から入る旧道入口



一戸町 川底の一里塚付近の旧道



一戸町 川底の一里塚



一戸町 その村近の旧道(左)と山道



一戸町 高屋敷～仁昌寺の間の道分石



一戸町 高屋敷の伝馬所跡



一戸町 高屋敷の一里塚付近の旧道



一戸町 高屋敷の一里塚



一戸町 女鹿口から高屋敷への旧道



一戸町 一戸駅付近の旧道



一戸町 西方寺入口



一戸町 一戸駅付近の旧道沿いの井戸



一戸町 本宮橋太郎氏宅地内の宝鏡院塔



一戸町 実相寺付近の旧道



一戸町 鳥越駿音堂



一戸町 渋打峠の一里塚(東側)



渋打峠の一里塚(西側)



一戸町 渋打峠の交叉點



二戸市 浪打神より二戸市への下り道



二戸市 村松の一里塚



二戸市 桜清水



二戸市 桜清水の地蔵



二戸市 吾香福岡神社参道



二戸市 桜蔭舎



二戸市 新・旧の岩谷橋(上は現国道 下が
旧道)



二戸市 岩谷観音



二戸市 岩谷橋付近の造石



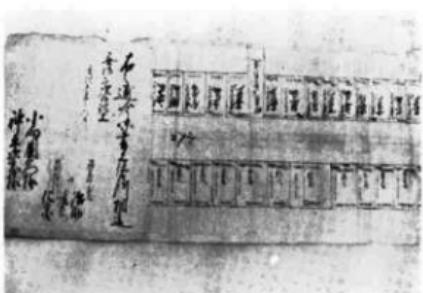
二戸市 横岡代官所への入口(現国分氏宅の門)



二戸市 龍巖寺



二戸市 菩導寺前の井戸



二戸市 福岡町の町割図



二戸市 検断所跡



二戸市 竹内神社の五輪塔



二戸市 竹内神社の大木



二戸市 塙野の追分石



旧長瀬橋への旧道



二戸市 長瀬橋たもとの追分碑



二戸市 下平の追分碑付近



二戸市 下平の追分碑



二戸市 下平の追分碑



二戸市 上田面の銃死供養碑



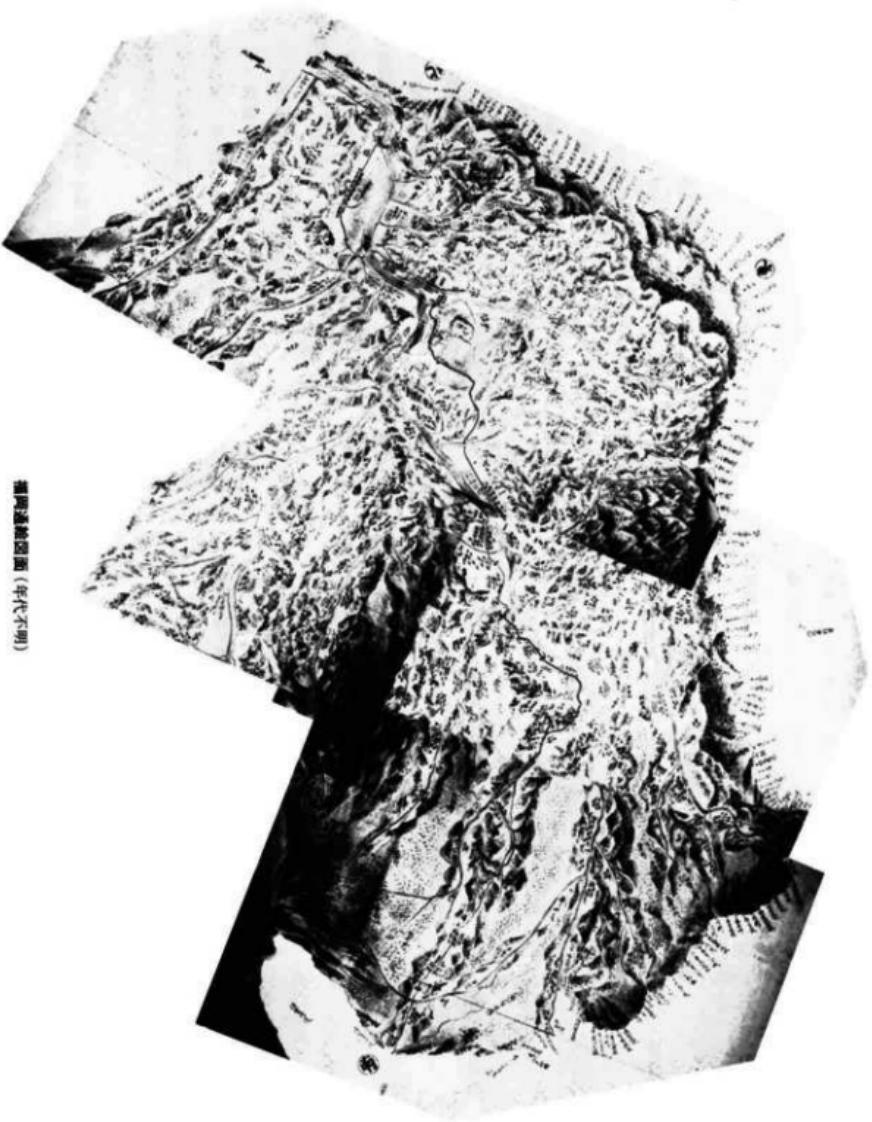
二戸市 金田一より府金坂への上り口



二戸市 府金坂の旧道



二戸市 薫か坂の旧道



圖版三
地圖 (年代不明)

四、街道に沿った公開施設

○中尊寺讀書處（法人）

同 資料館

西磐井郡平泉町字衣闌

鉄筋コンクリート造・二階建

中尊寺一山に伝わる国宝・重要文化財等三千余点を収蔵し、仏像・仏具

・絵画など平泉藤原四代関係資料を公開。資料館には古代から近世に至る

平泉関係の歴史を知る文献をはじめ、宗教・民俗・考古資料等、市広く平

泉文化を理解し得る関係資料を展示。

○毛越寺宝物館（法人）

西磐井郡平泉町字大沢58 毛越寺内

鉄筋コンクリート造・高床式建築

同寺に伝わる藤原期の仏像・典籍・工芸品等、また境内等の発掘調査による埋蔵文化財、重要無形民俗文化財「延年の舞」関係の諸具を展示。

○平泉博物館（団体）

西磐井郡平泉町志羅山81—1

鉄筋コンクリート造・高床式建築

日本・東洋仏教美術品、郷土関係考古発掘資料をはじめ、著名人遺墨、武具類、民芸品、更に、源義経関係の江戸期版画などのコレクション等、常時四五〇点以上を展示。

○平泉文化史館（団体）

西磐井郡平泉町中尊寺ロータリー前

鉄筋コンクリート造・高床式建築

平泉文化を紹介するパネル・ジオラマ、遺跡復原模型等をはじめ、仏教

○懐德館（村立）

胆沢郡衣川村下衣川字日向60—2

鉄筋コンクリート造・三層建

城郭様式の建築。施設の特性をいかして郷土の歴史、民俗関係資料を

展示。

○高野長英記念館（市立）

水沢市中上野一—十九

鉄筋コンクリート造

高野長英に関する歴史・文献・伝記資料、遺墨・書簡・肖像画、著作物など貴重な資料が多く、研究上の収集も出来る。

○薬師富実記念館（市立）

木沢市吉小路24

鉄筋コンクリート造・二階建

旧薬師富実邸一隅に位置して、夫妻に関する一代の遺品と伝記資料、特に一二・二六事件関係資料、遺墨などを展示。他に二万余点の蔵書がある。

○後藤新平記念館（市立）

付後藤新平生家

水沢市表小路5 水沢市吉小路

鉄筋コンクリート造・二階建

後藤新平関係の遺品伝記資料、特に写真・遺墨・書簡・著述物。さらに記念品等も陳列されている。特に東京放送局總裁就任に伴なう放送文化センターは特色がある。

○香藤影古館（私立）

■水沢市田小路16

鉄筋コンクリート造

斎藤寅太郎コレクションの公開施設。一般古美術・書跡・古文書・考古
発掘資料、版画等を展示。

○北上市立博物館（市立）

■北上市黒沢尻立花14-59

本館 ■鉄筋コンクリート造

民俗資料館 ■木造

旧菅野家住宅（重要文化財）

本館・民俗資料館・旧菅野家住宅の三施設からなっている。本館には

「北上川とその流域に生きた人々」をテーマにした原始と現代に至る歴史

・・考占・民俗関係など種々の文化財資料・また、北上市周辺の動物・昆

虫類・植物、更に北上川流域の魚類等が展示されている。重文菅野家住宅

は、市内口内町の通称「中村屋敷」（享保十三年建築）を移転復原して公

開しているもの。民俗資料館は「家の暮らし」・「外のしこと」を中心とし

た各種資料が展示され、屋外には水車小屋・バッタリ等の農村資料も復原

されている。なお年二回程度地域課題に即して特別展が企画公開される。

○光林寺修蔵館（法人）

■稗貫郡石鳥谷町中守林光林寺内

鉄筋コンクリート造高床式建築

同寺に伝わる仏像・典籍・絵画、並びに天正十八年浅野長政の寺領寄進
状等郷土史料等を展示。

○蔵修館（法人）

■花巻市南川原95 光徳寺内

鉄筋コンクリート造

故多田等観コレクション、チベット宗教関係資料を収蔵。

○郷土史料館（市立）

付旧中村家住宅（重要文化財）

■盛岡市愛宕町14-1 盛岡市公民館内

十蔵造・一部二階建

中村家住宅は、元市内南大通にあった幕末建築の商家で、通称「糸治」と
呼ばれた屋敷を移転復原し公開されている。
○原敬記念館（市立）

付原敬生家

■盛岡市本宮字熊堂93

鉄筋コンクリート造、高床式建築

原敬関係遺品、伝記、遺墨、著述物などを展示。

○称徳館（私立）

■盛岡市茶畠二丁目15

土蔵造二階建

中村七三家の父子二代に亘る馬事関係資料のコレクション。馬具・歴史
文獻、絵馬・民俗信仰、民芸、版画、更に世界各国の馬玩真に至るまで広
範な馬に関する文化資料を収蔵展示。

○盛岡山王美術館（私立）

■盛岡市山王町

鉄筋コンクリート造二階建

故影山忠雄コレクションを収蔵展示。主な收藏品は古美術陶磁・刀剣武
具・郷土関係絵画・遺墨・民具等である。

○盛岡櫻木美術館（法人）

■盛岡市加賀野才ノ神 10

鉄筋コンクリート造（南部曲家復原）

絵画彫刻・古陶磁・民芸館、それに南部出石家建築等からなっており、

展示品は橋本八百二初期から現在までの作品、バルビゾン派等 18、19世紀

絵画、郷土の物故者作品を含む国内作家の絵画彫刻。その他、古陶磁・伝

統工芸品・農具・馬具、民間信仰資料等その内容は豊富、約五千平方米の

展示室。

○盛岡山車資料館（団体）

■盛岡市八幡町 13 盛岡八幡宮境内

鉄骨造二階建

盛岡八幡宮祭典の「山車」保存展示館。祭礼山車・その他関係資料を収

蔵す。

○啄木新婚の家（団体）

■盛岡市中央通三丁目 17

木造

旧盛岡藩武家屋敷の建物で、明治三十八年、石川啄木夫妻が新婚時代に

止宿した旧家で、現在、保存公開している。

○岩手県立農業博物館（県立）

■岩手郡滝沢村 20 地割砂込

鉄筋コンクリート造二階建

県内農業発達史が展望出来る農産生産具・生活文化を物語る関係資料を展示。また館外には水車・バッタリ・ヒエムロ等を復原公開。

○石川啄木記念館

付旧渋民小学校舎

■岩手郡玉山村字渋民

○石川啄木関係の遺品遺墨・写真等関係資料を展示

■玉山村巻塗

鉄筋コンクリート造・平屋建

村内で発掘された上器・石器などの考古資料や玉山村の民家で使用した農業関係の資料や歴史資料などが保管・展示されている。

○北進印刷考古資料室（個人）

■岩手町苗代沢

木造

北上川上流地域の考古学資料出土品多数が展示されている。

○二戸市歴史民俗資料館（市立）

■二戸市福岡字長嶺 80-1

鉄筋コンクリート造二階建

市内産の新第三紀鮮新世・同中新世に属する化石類、市内出土埋藏文化財資料、郷土の物故者伝記資料、特に相馬大作・田中頼愛橋博士・四分謙吉関係遺墨・資料等を展示了。コーサーを特設している。また、二戸の伝統特産である漆に関する生産具・文献・民具等一連の資料は貴重。その他、郷土関係民俗、民芸資料等を展示。

本書は乾坤一冊よりなり、江戸口本橋より盛岡城下日影御門まで、道中・宿駅などの状況を描いたものである。彩色が施してある。盛岡公民館所蔵で、一部『岩手県史』にも引用されているが、江戸時代の道中の状況を知る上に貴重な資料である。筆者の清水秋全は、『盛岡諸家忌辰録』の「東顕寺」の項に、「清水秋全 右エ門七 神道 歌 明和三年（一七六〇）三月十日没 六十一才」とある。吉田義昭氏によれば、本書は寛延年間に書かれたという。江戸時代中頃の状況を知ることが出来る。

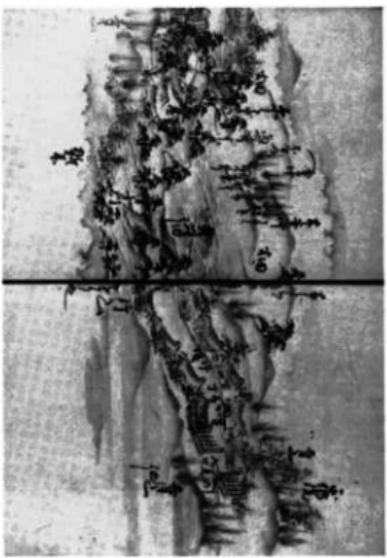
ここには、岩手県に入った「鬼死骸村」から「盛岡城下」に入るまでの主要部分を抜粋して掲げた。

盛岡城下以北、南部領の主要街道の見取図を附した地理案内書である。全三巻からなり、第一巻は「東州道中」の盛岡から野辺地を経て馬門の二本橋御境（津軽領との境）までである。第二巻は野辺地より北半島地方まで、第三巻は下市川より八戸までと、三ノから田子一大湯—花輪—田山—淨法寺—小繩までを書いてある。筆写本は盛岡公民館、岩手県立図書館その他個人でも所蔵されているが、ここでは「南部叢書」に収められたのを利用した。第一巻のうち盛岡から義ヶ坂までの見取図で、解説は省略した。本書は津戸茂樹の筆になるもので、太田孝太郎氏の解説による。茂樹は藩の新当流師範役として傍ら書画をよくし、明治六年（一八七三）十月二日八十四才で没したとある。従って、本書は製作年代ははつきりしないが、幕末のものである。

一関市(東主町付近)



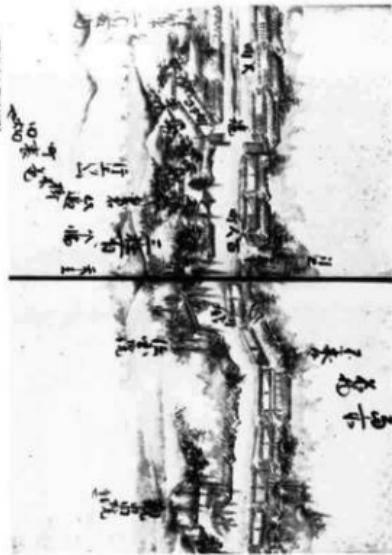
一関市の入口



↑

↑

一関市(大町付近)

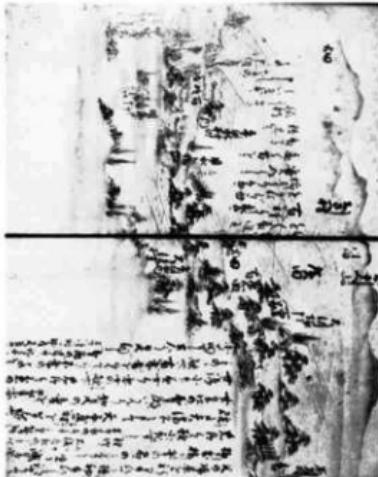


一関市(東毛利村付近)



増補行程記 清水秋全筆

平賀町大字の一里塚付近



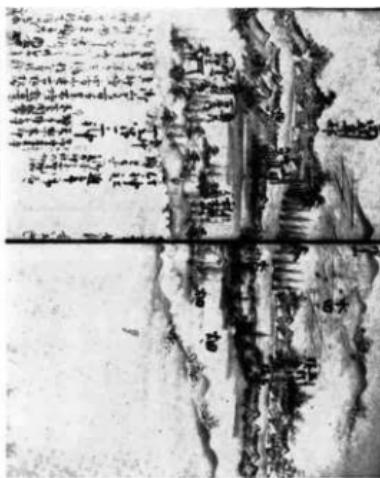
一関市(山ノ目)の出口



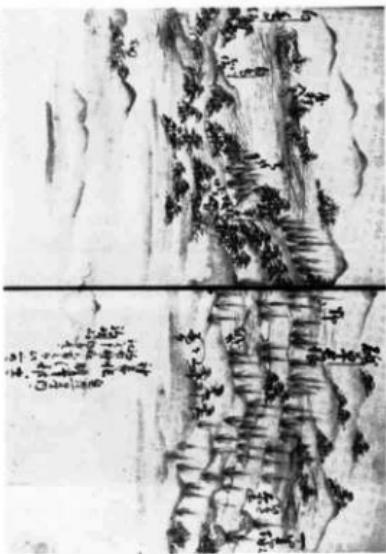
一関市(中里)



一関市(山ノ目)の櫻山付近



前沢町(白鳥川附近)



↑

平泉町(黒瀬川附近)



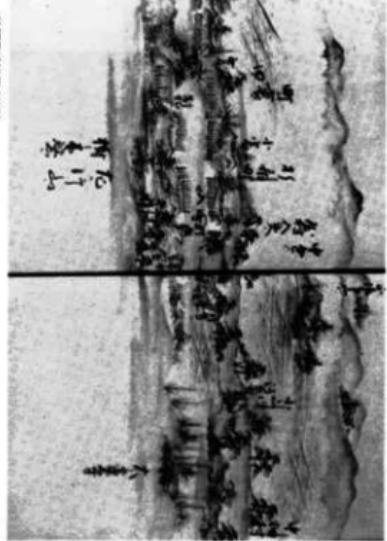
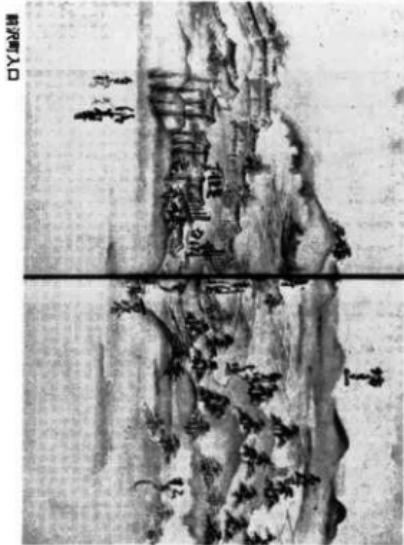
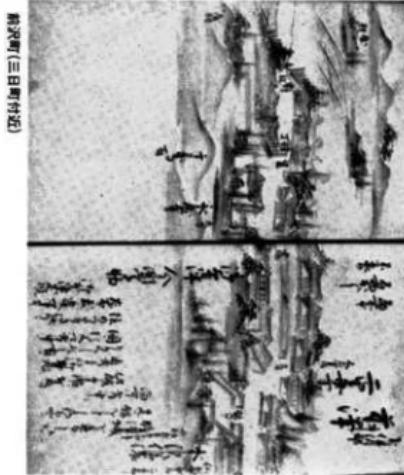
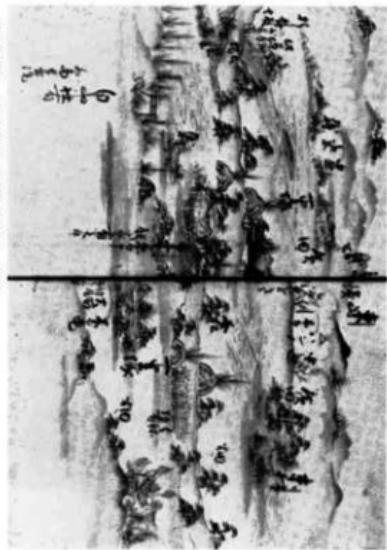
↑

黒瀬川附近

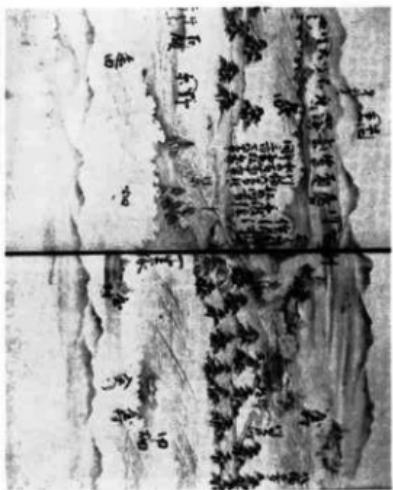


平泉町(黒瀬川附近)

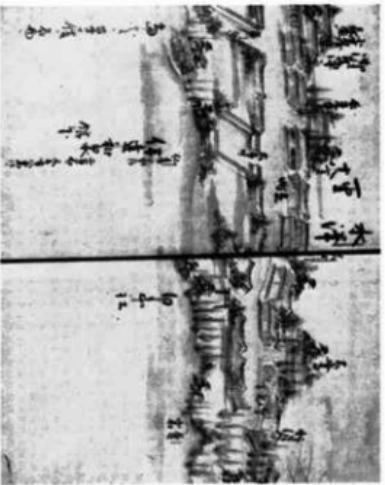




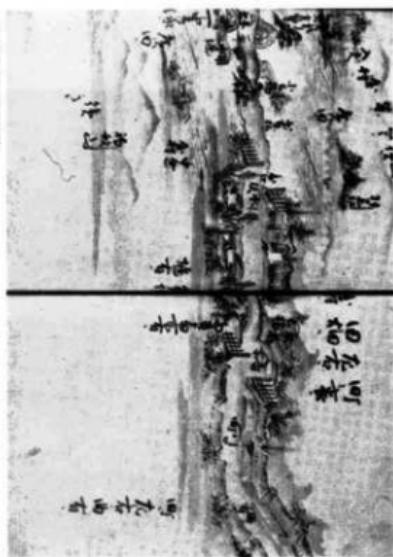
* 四川省川北の水害(1950年)



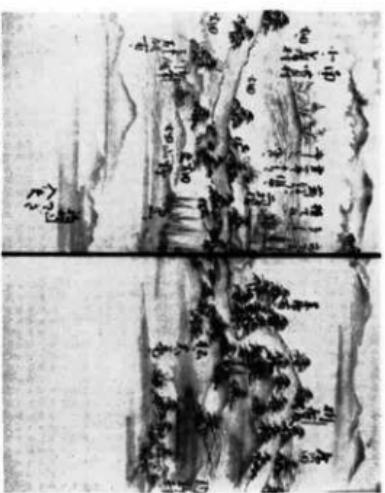
* 河南省(立河付近)

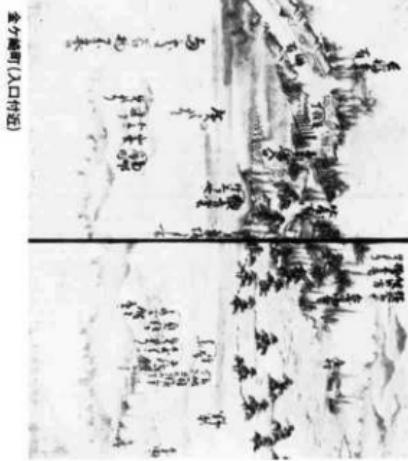
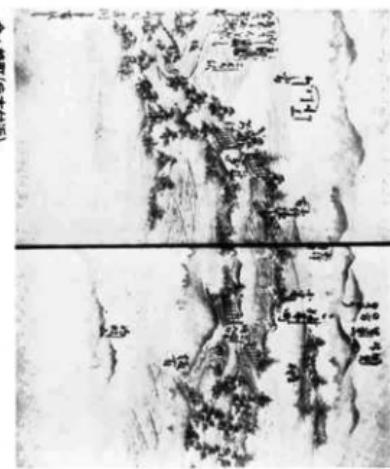
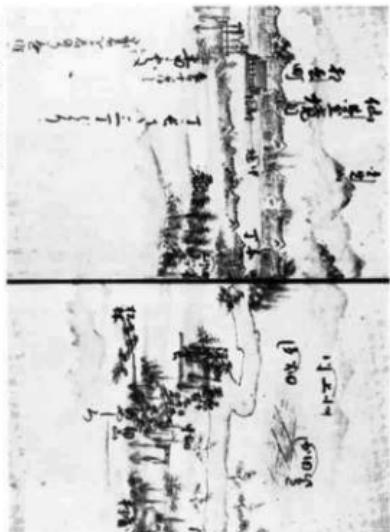


* 河南省(河口付近)

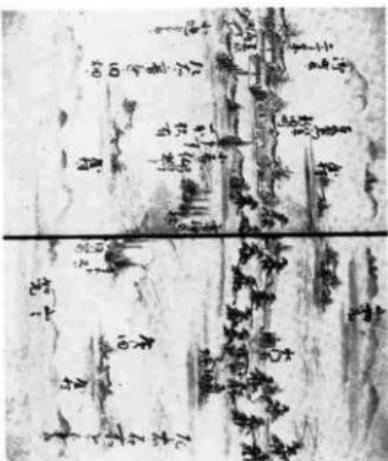


* 河南省(新密附近)



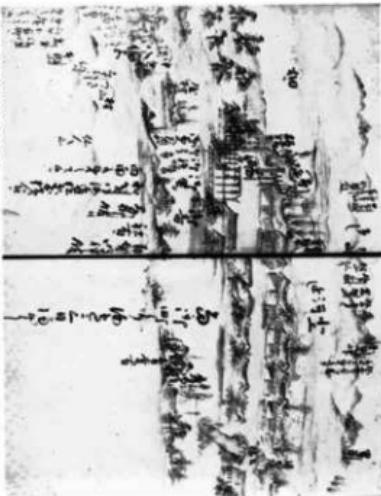


北上市(黒沢原町入口)



↑

北上市(黒沢原町)

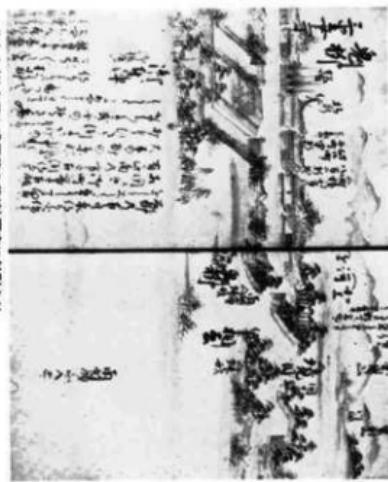


↑

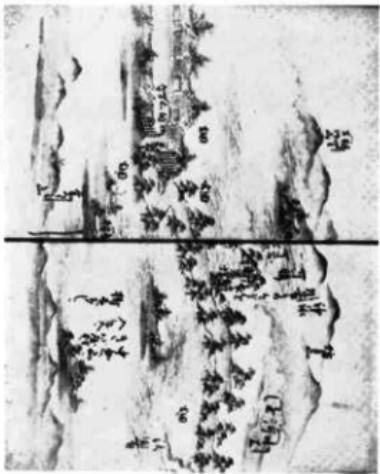
北上市(朝日町の街並)



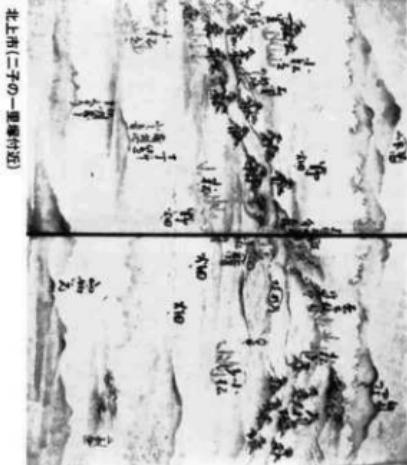
北上市(仙台原と黒沢原の交境)両方に地形あり



花巻市(原心丁入口付近)

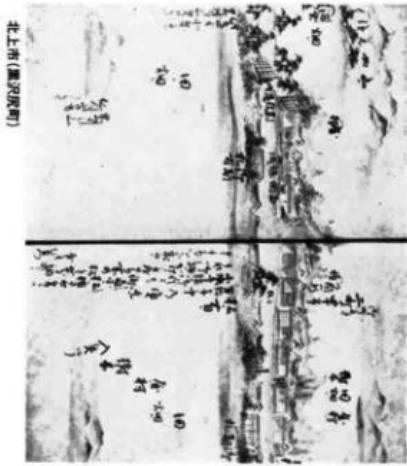
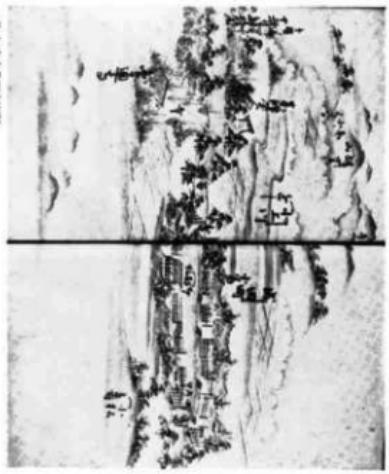


↑

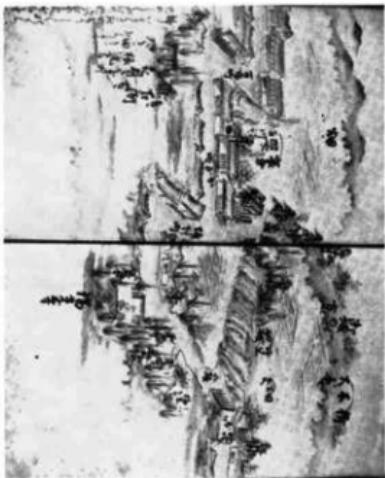


↑

北上市(成田付近)



花輪屋(一)口面付近



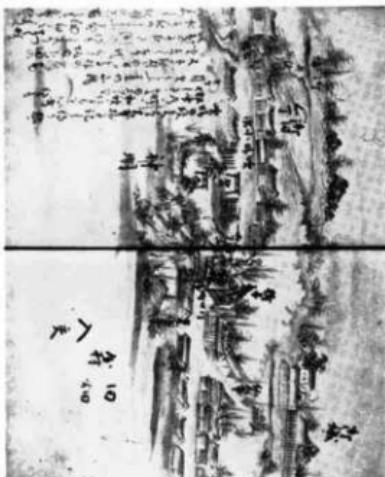
花輪屋(二)口面付近



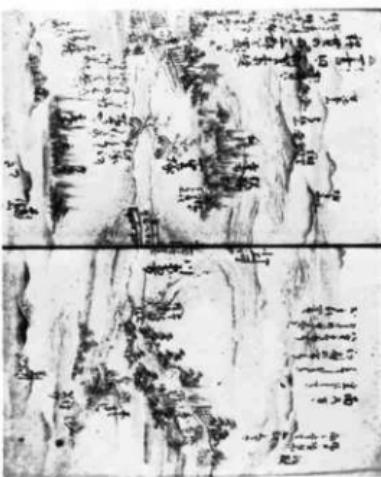
↑

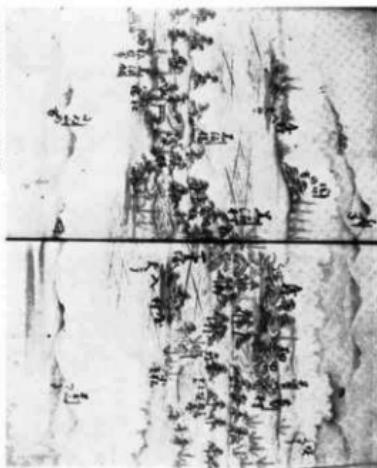
↑

花輪屋(三)口面付近

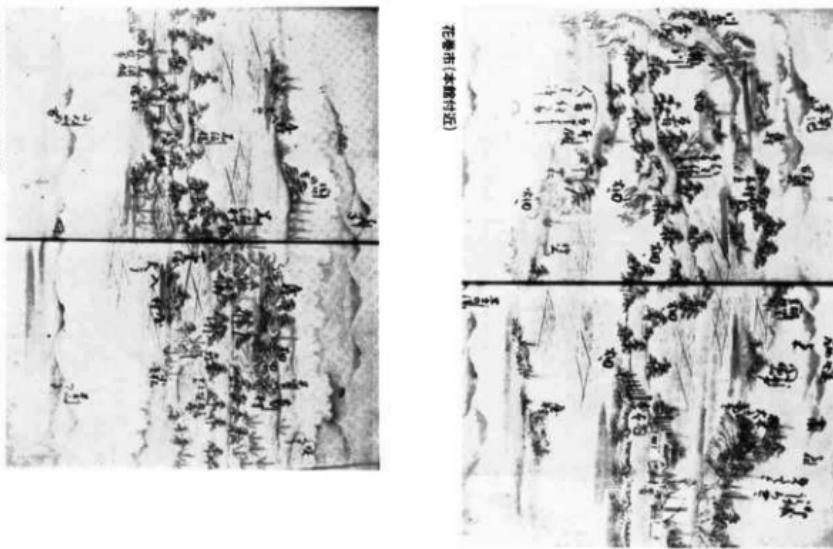
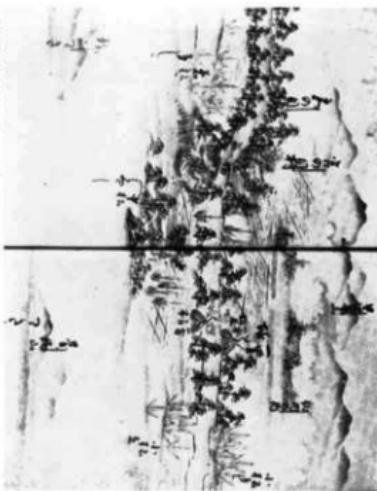


花輪屋(四)口面付近

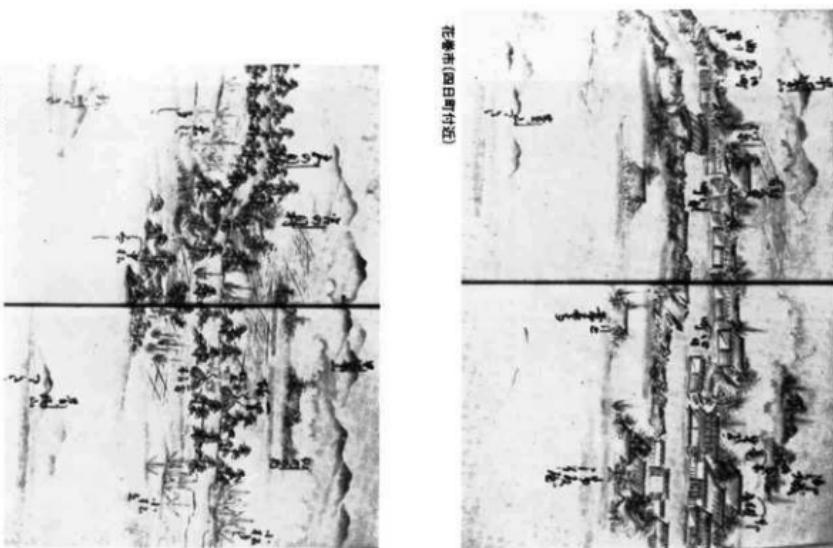




↑



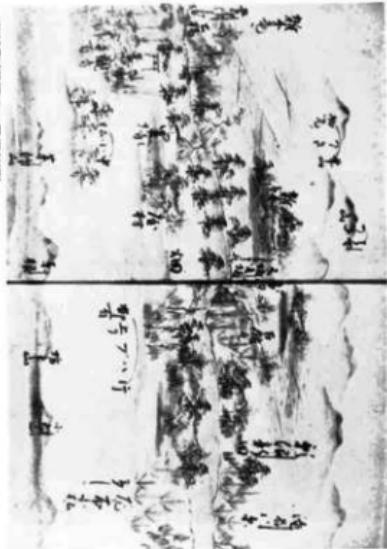
↑



磐梯町(本郷町の北神社付近)



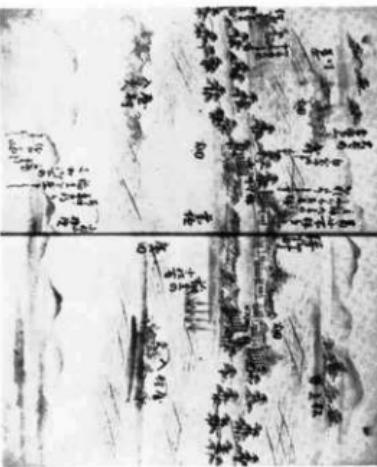
磐梯町(磐梯山の一里塚付近)



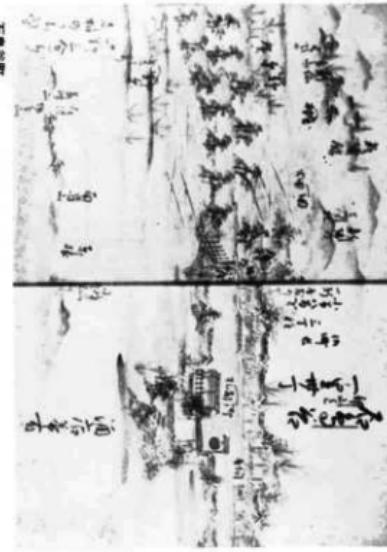
↑

↑

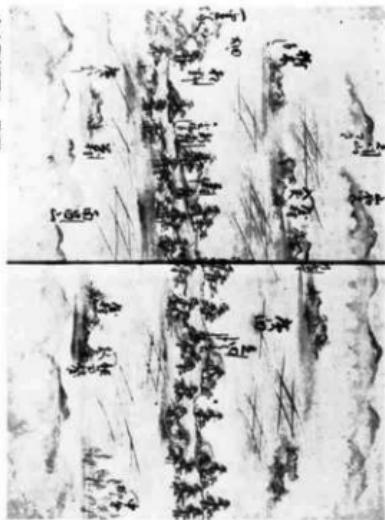
磐梯町(坂野野原付近)



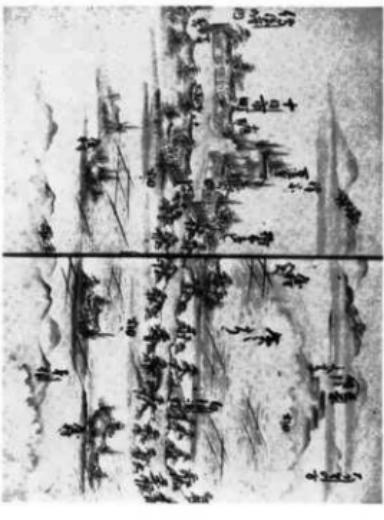
石鳥谷町



矢巾町(梅野の一里塚)



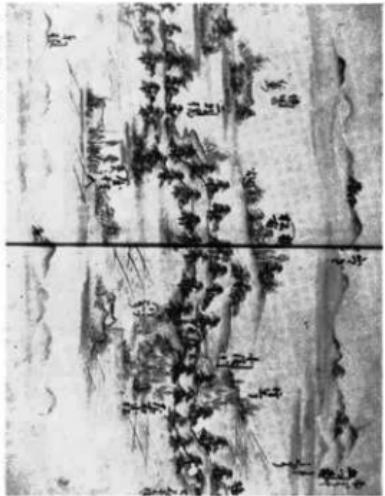
豊浦町(十日市町付近)



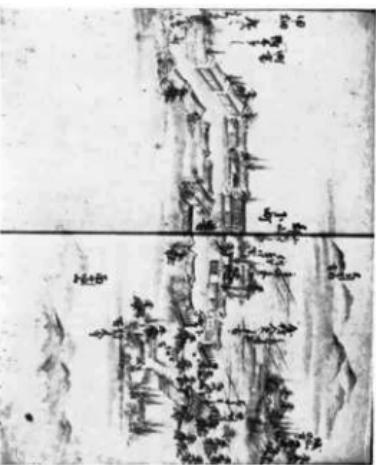
↑

↑

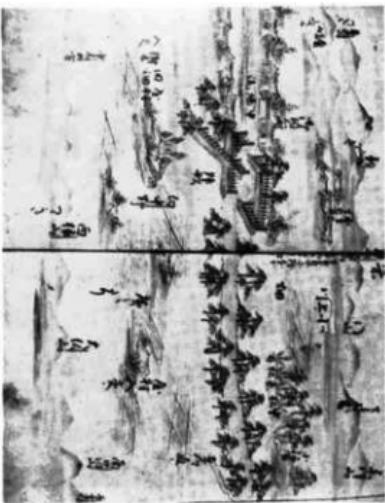
矢巾町(梅田付近)



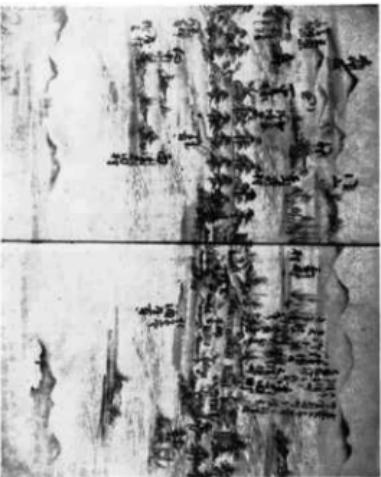
豊浦町(下町付近)



盛岡市(仙北町付近)



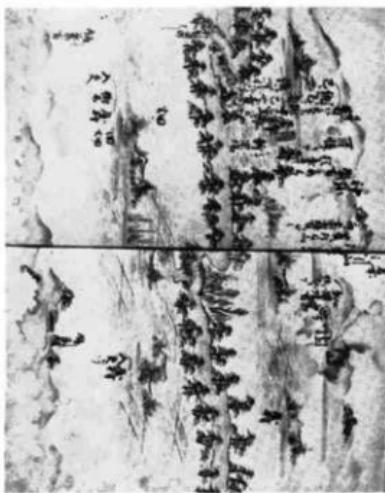
盛岡市(東本町付近)



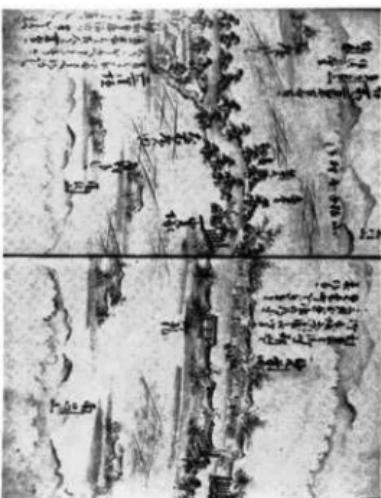
↑

↑

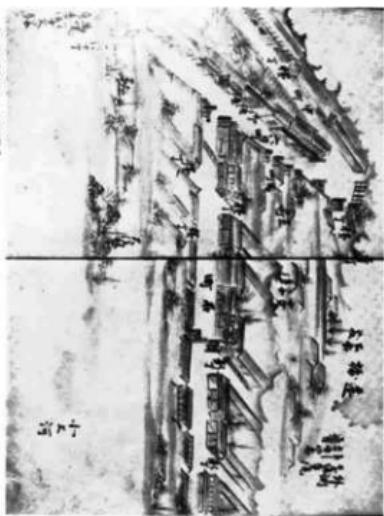
盛岡市(小堀町堤付近)



盛岡市(東前田付近)

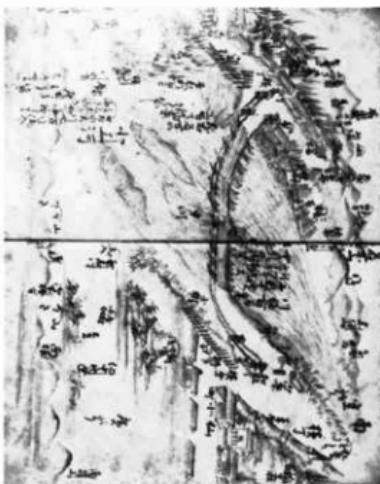


盛岡市(後町一六日町)



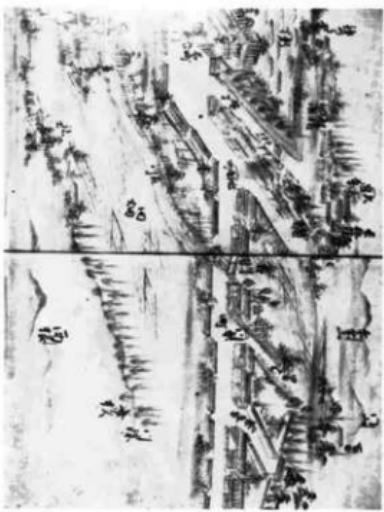
↑

盛岡市(明治橋付近一舟橋)

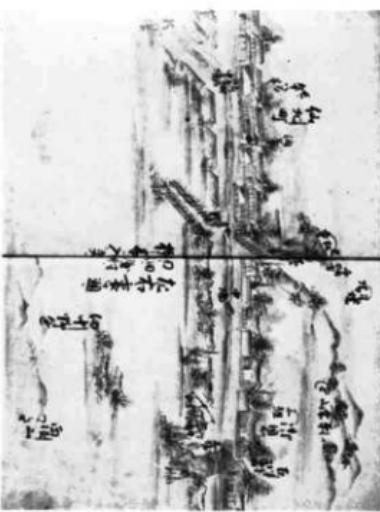


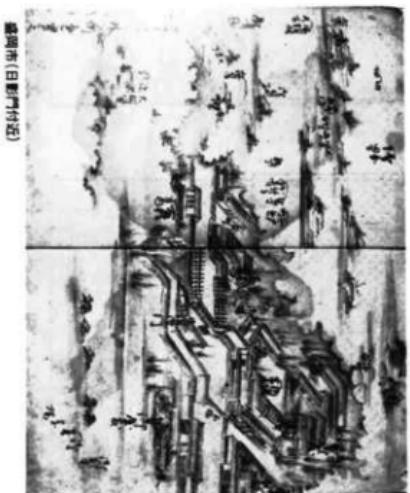
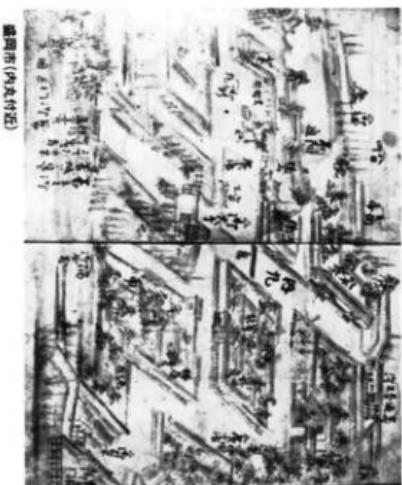
↑

盛岡市(川原町より船町の入口)

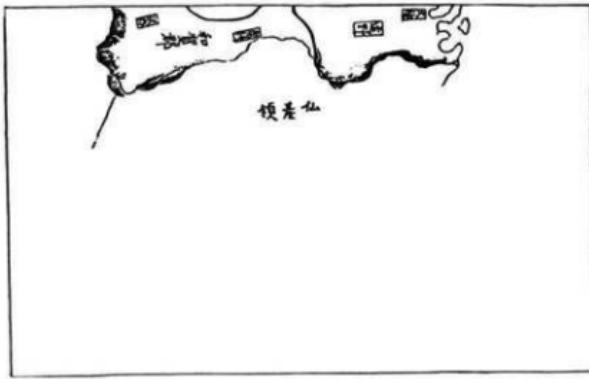
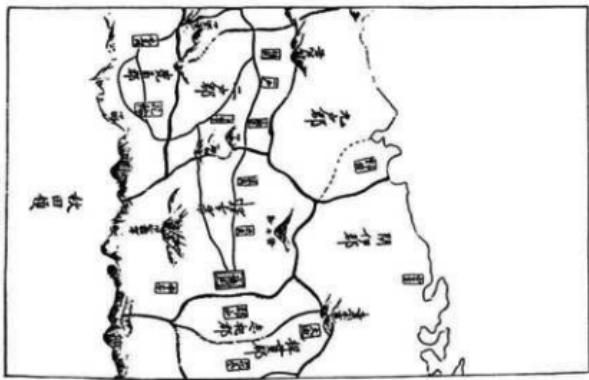
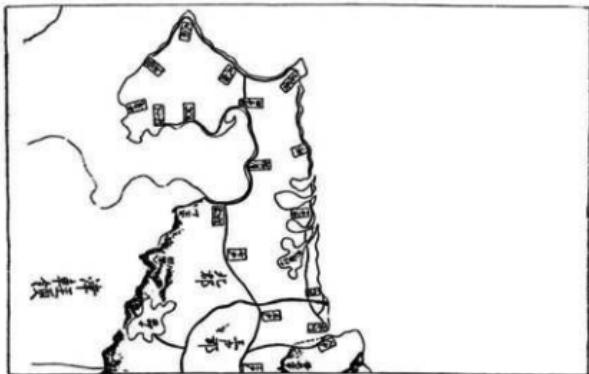


盛岡市(船北町)

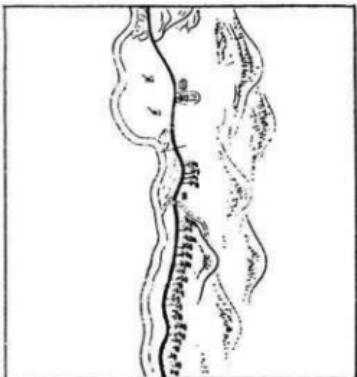




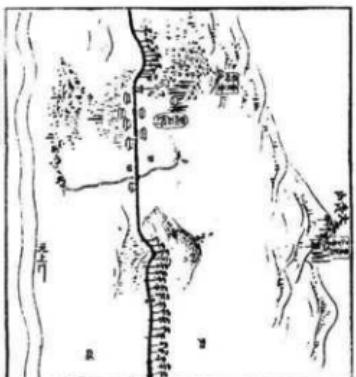
北奥路程記



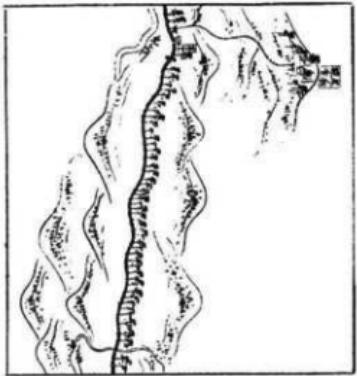
玉山林(川口平付近)



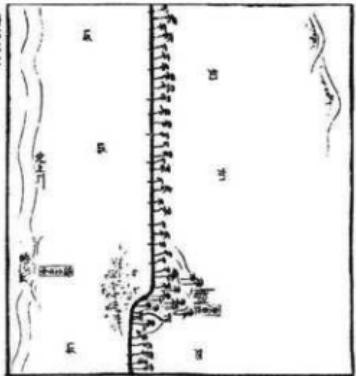
盛岡市(黒石野付近)



小野松一里塚



高松神社

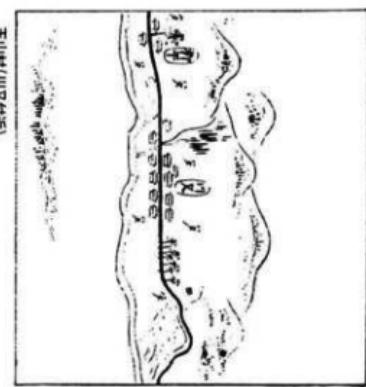
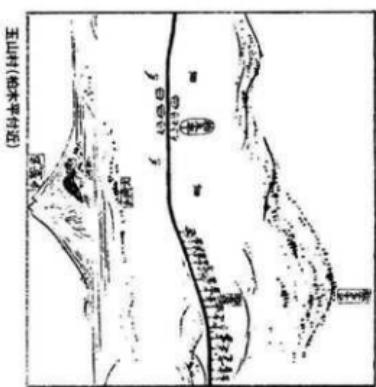
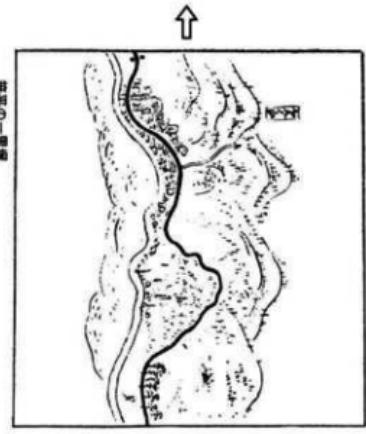
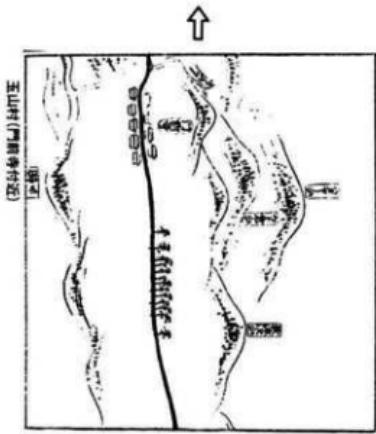
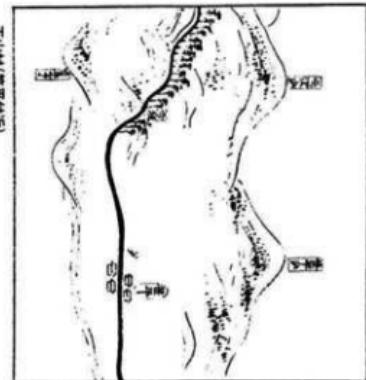
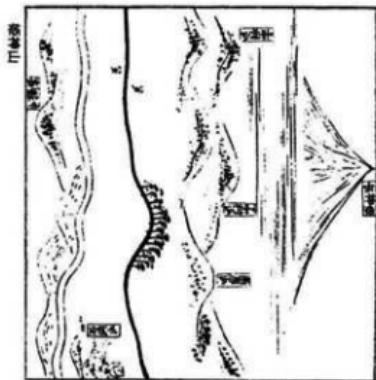


奥源

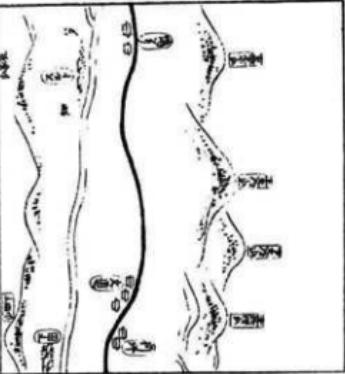
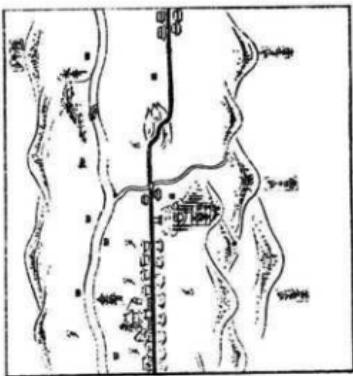


(高松池) 盛岡市(上田村付近)

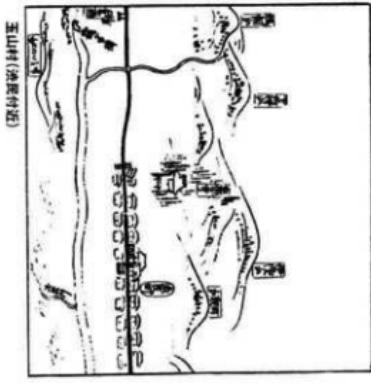
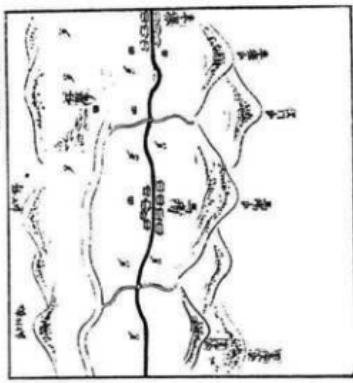




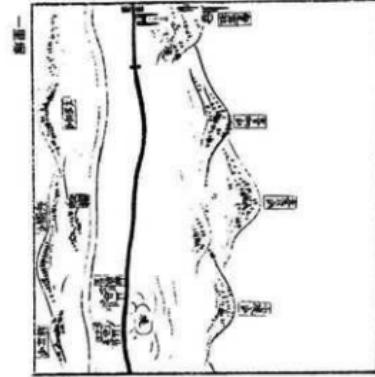
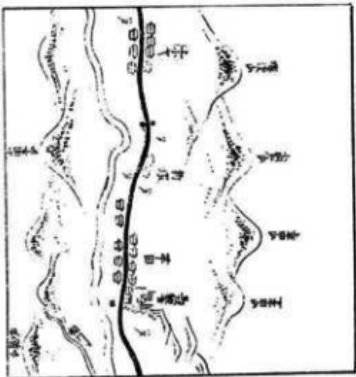
玉山村(新村付近)



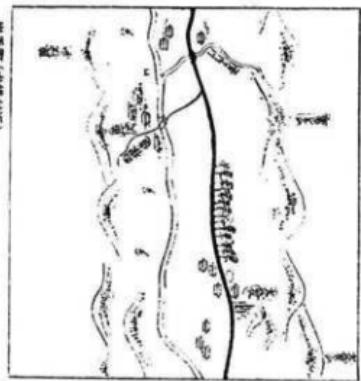
玉山村(新村付近)



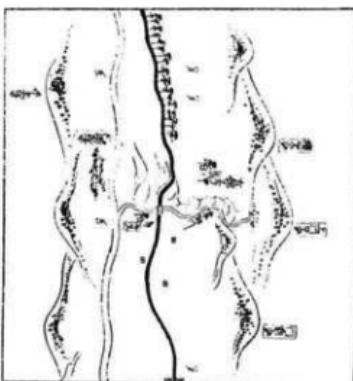
一里塚(新村の河原町)



岩手町(火祭付近)



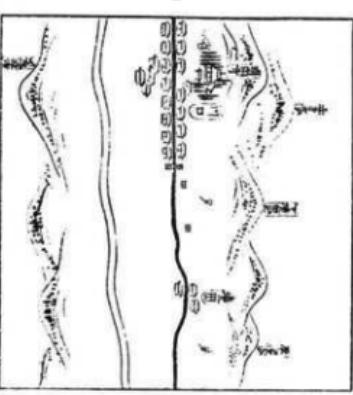
岩手町 川口川(火祭付近)



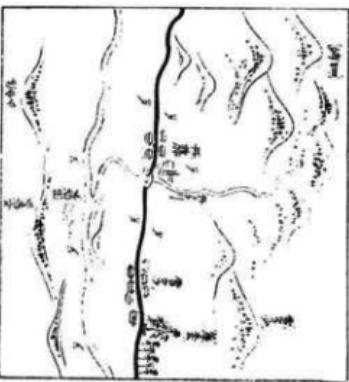
丹波の一部



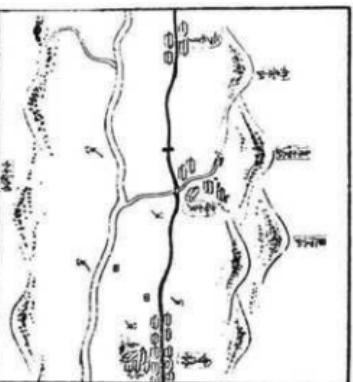
田代川(火祭付近)



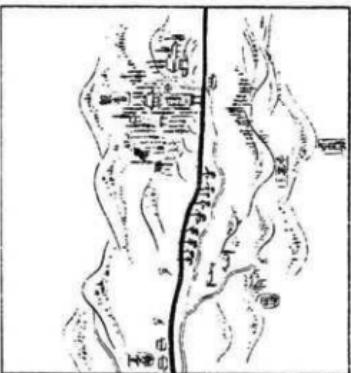
岩手町(内藤付近)



田代川(火祭付近) 玉山神社の出張用



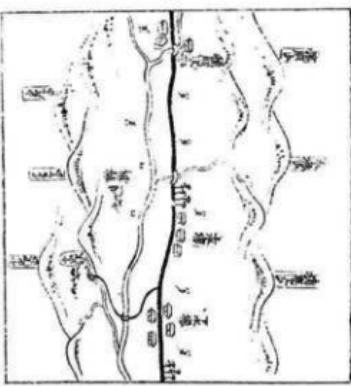
岩手町(御金持付近)



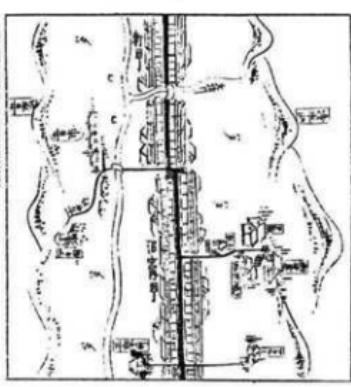
一里塚



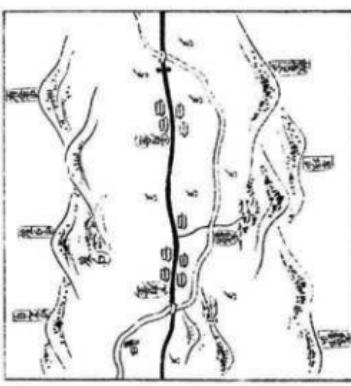
岩手町(木造付近)



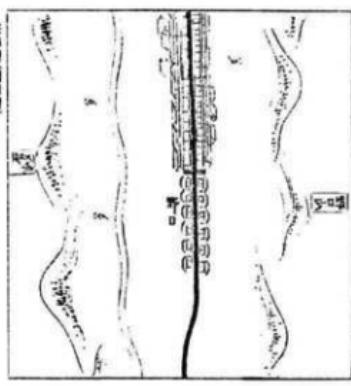
岩手町(石高代官所付近)



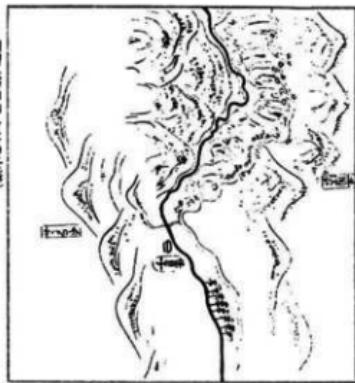
市金の一部地図



岩手町(野口川)



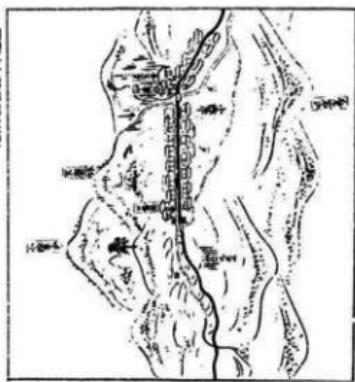
一戸町(後日子よりの山道)



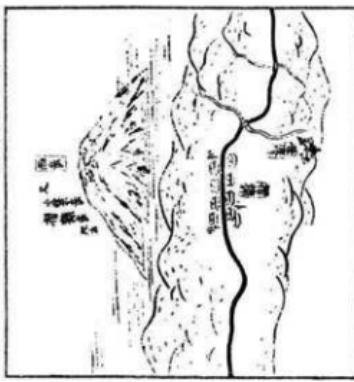
一戸町(中山村近)一里塚



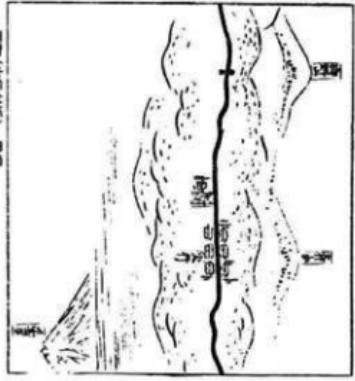
一戸町(小瀬新村近)



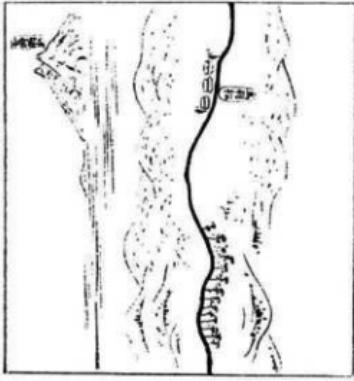
一戸町(中山一里塚付近)



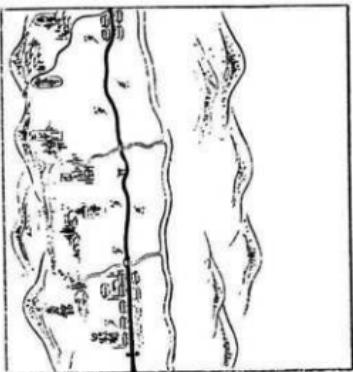
一戸町(火行付近)一里塚



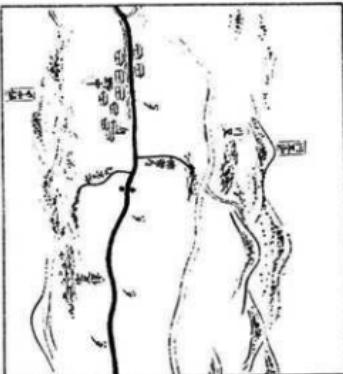
一戸町(中山一里塚付近)



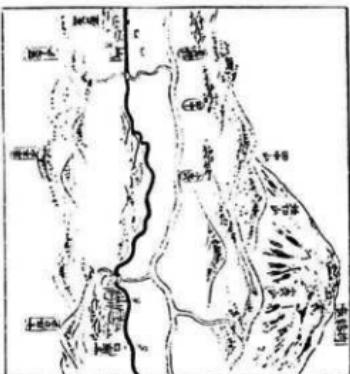
第一回(近江一郡) 河内



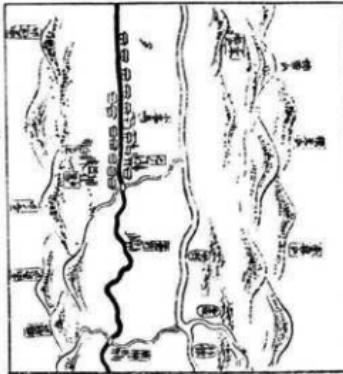
第一回(近江一郡) 河内



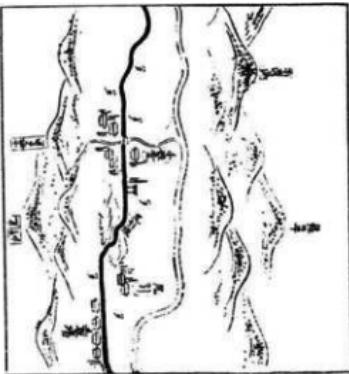
二回(近江一郡) 口



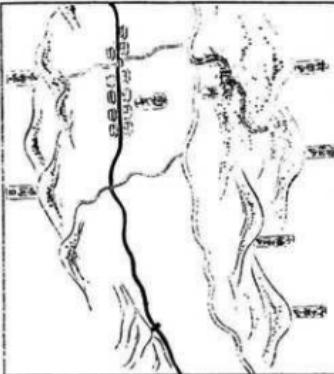
二回(近江一郡) 口



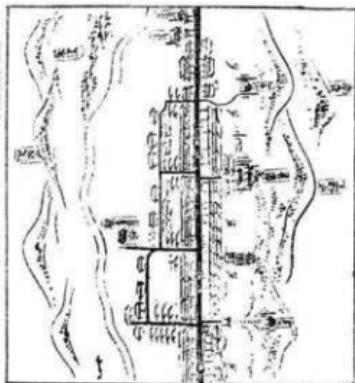
三回(近江一郡) 小野



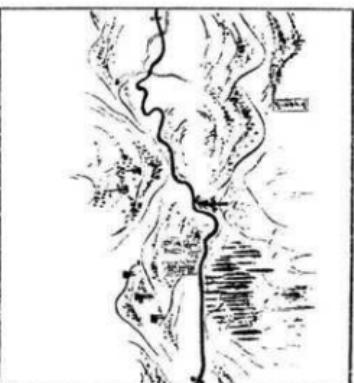
三回(近江一郡) 小野



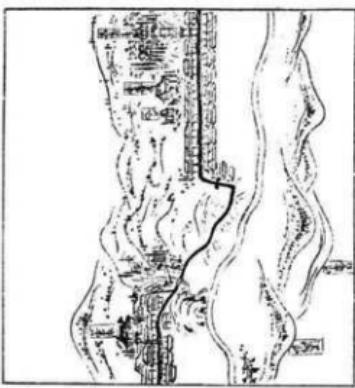
二戸市(福岡町)



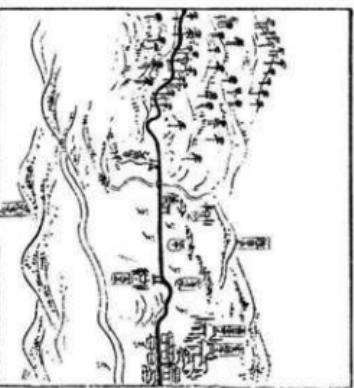
岩手県の一戸町



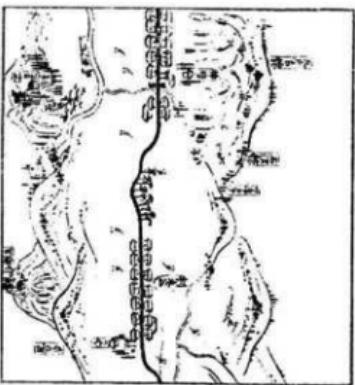
二戸市(福岡町)一戸町



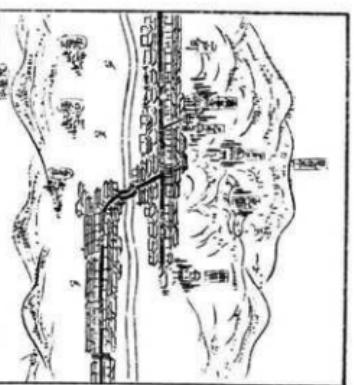
一戸町

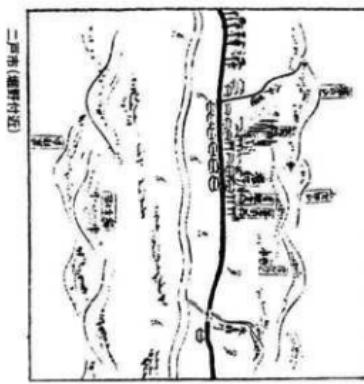
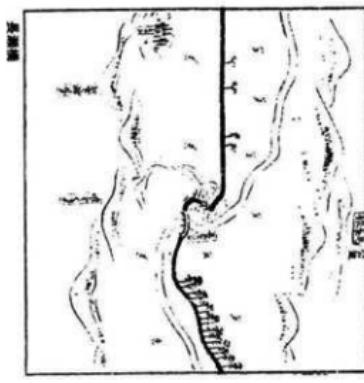
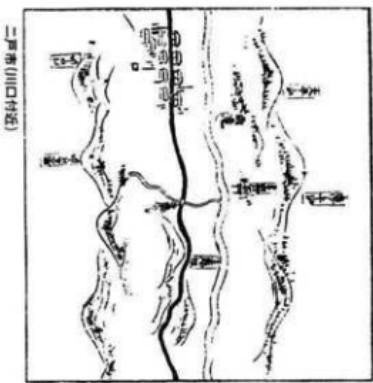
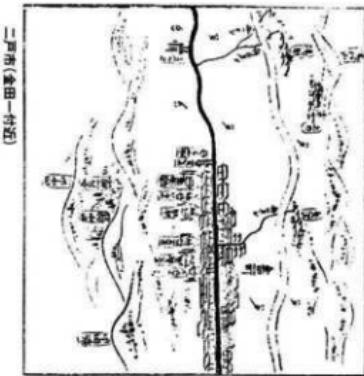
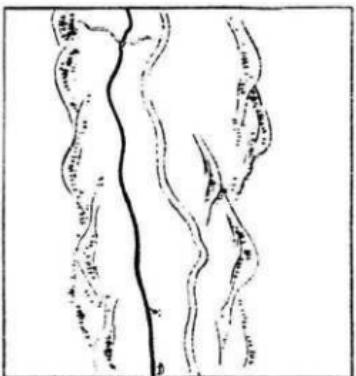


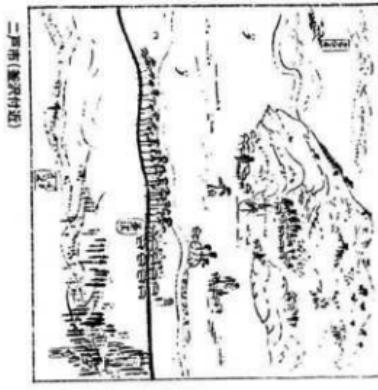
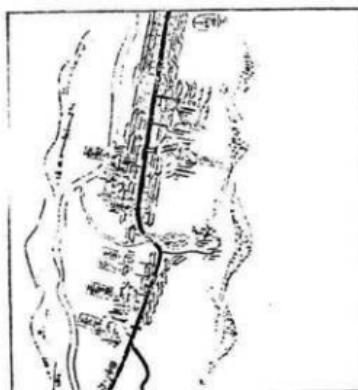
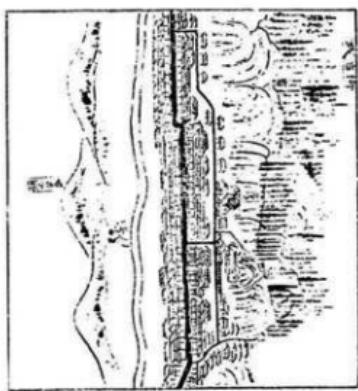
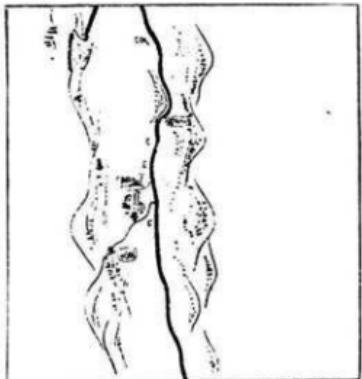
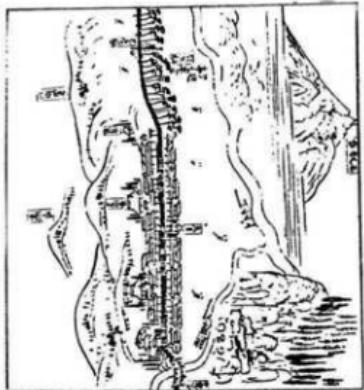
二戸市(村松村)



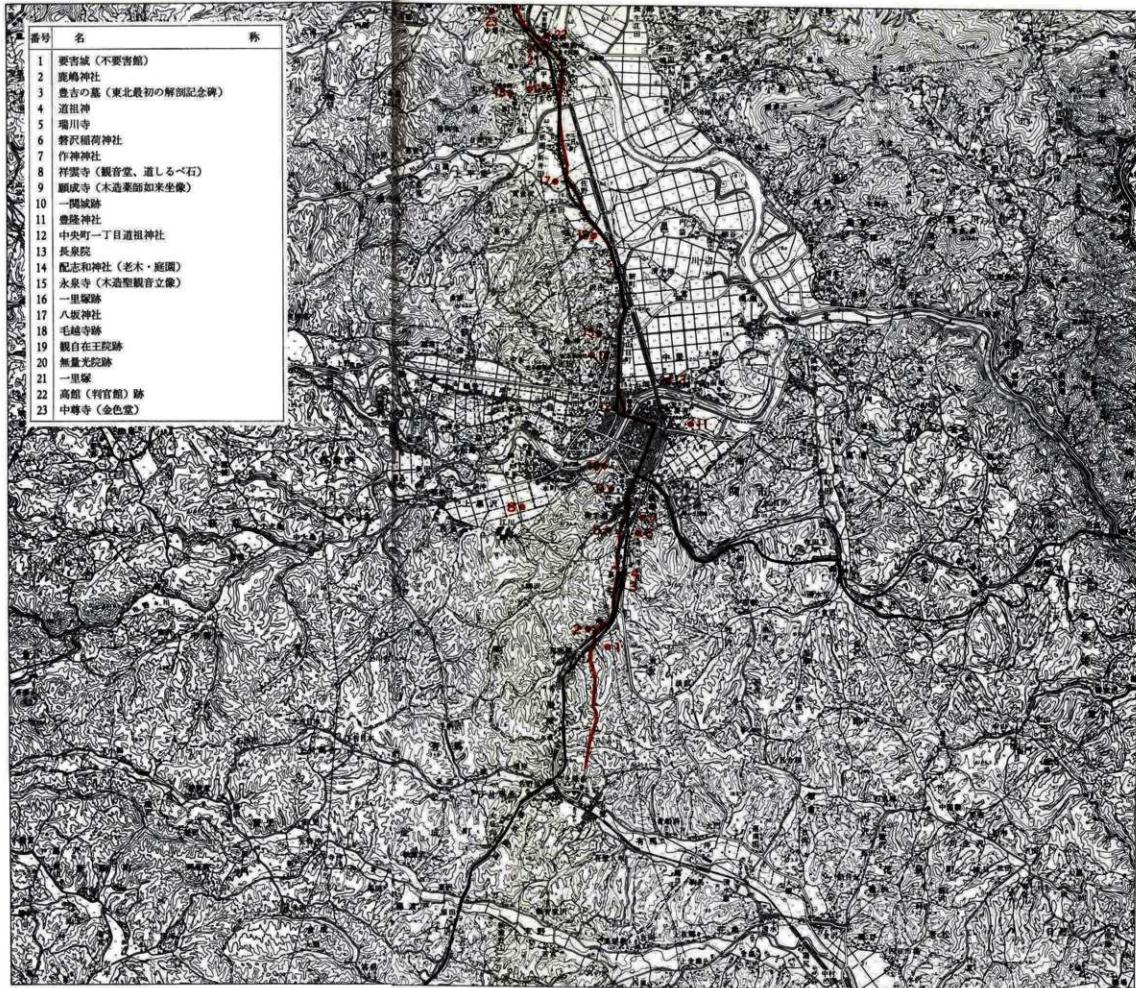
一戸町



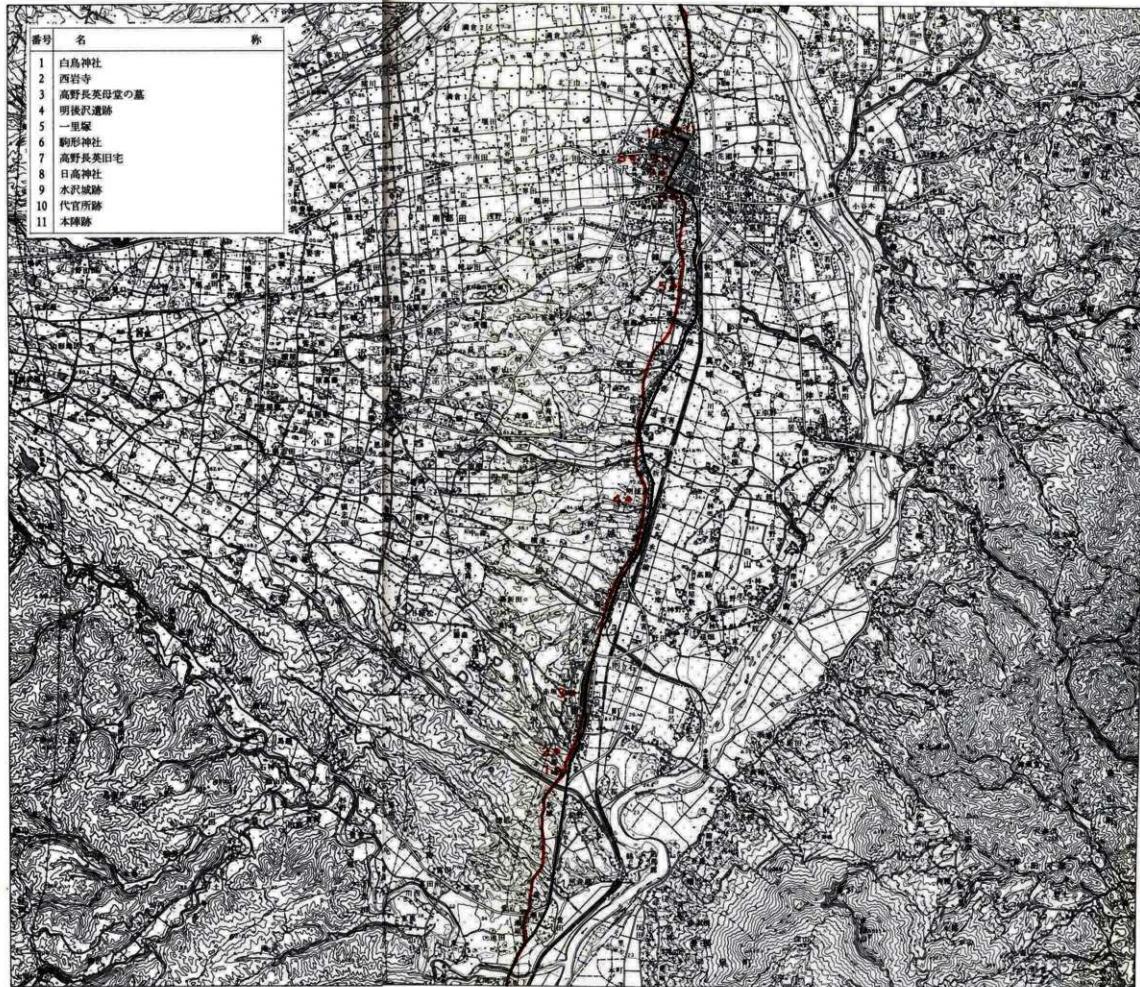




奥州道中(1) 一関市～平泉町



奥州道中(2) 衣川村～前沢町～水沢市



奥州道中(3) 水沢市～金ヶ崎町～北上市

